

インテリジェンス・ダイブ

高久 真生
(たかく まさお)

インテリジェンス・ダイブ

高久 真生
(たかく まさお)

プロローグ

「あれれ？ 誰だ？」

僕は思わず目をこする。

なんて小さい背中なんだ。

よく見ると、そこにいたのは、やっぱり僕の父さんだった。

蒸し暑い八月の日曜日の昼下がり、父さんは庭に向かって座っていた。

傍らには、よくテレビのCMに出てくるビールの缶が一つ。

父さんはぼーっとどこかを見ていたんだと思う。いつも手の中で転がしていた胡桃は、もう持っていないなかった。

鍛え上げられたはずの肩は落ち、背中は丸い。

こんな父さん、見たことがなかった。

「父さん！」

呼ぼうとする声は、なぜか喉から出るのを拒んだ。まるで空気で喉に栓をされたみたいだった。

もう、銃弾が飛び交ったり、人の足が吹き飛んだりするところに行かないって、母さんと約束してたじゃないか。

朝まで二人で怒鳴り合いの喧嘩していたみたいだけれど、最後には母さんは喜んで泣いていた。

「やっつと、一緒に暮らせる」って。

僕がどんなに悪いことをしても泣かないのに。

父さんはいいことしたはずなのに、どうしてそんなに消えちまいそうなんだ。

色々と気になったけれど、結局僕は父さんに何も話しかけられなかった。

その日の夕方、父さんはいなくなった。

乱暴に殴り書きした離婚届を台所のテーブルに置いて。父さんが僕たちに置いて行ったものは、それだけだった。

母さんは意外なことに、泣きも叫びもせず、口を真一文字に引き結んで、離婚届をじっと見ていた。

十歳の僕は、ただ呆然とするしかできなくて、まわりで大人たちが母さんを庇い、父さんを大声でけなすのを、聞いていた。

あいつは戦争ジャンキーなんだって。

戦争してないと生きていけない人間のクズみたいな奴だって。

耳に聞こえてくる言葉は嵐のように僕の鼓膜を叩きまくっていた。けれど、僕にとっては、そんなことはどうでも良かった。

とつづくに知っていた。

父さんが人殺しだったことぐらい。

十歳は訳のわからない小さなガキんちよじゃない。

だけど、子供にとって、大事なことは、たったの一つ。

要するに、父さんは僕らを捨てて、戦争を選んだってことだ。

それ以上でも、それ以下でもない。

あれから、六年。

あの後すぐ、俺んちは引っ越し、俺の名字も変わった。

俺は新緑のうるさいぐらいに青臭い匂いを嗅ぎながら、空を振り仰ぐ。

人間のクズ呼ばわりされたあいつが、今、このでっかい空の下のどこでどうしてるか、俺は知らない。

それは決して俺のせいじゃない。

だって、マジで誰も知らないんだから。

そういうことだって、あるんだ。

「では、等々力君に大きな拍手を！」

割れんばかりの拍手が、体育館の中に木霊する。

俺は高校の体育館の壇上でスポットライトを浴び、拍手を一身に受けていた。

時は、ゴールデン・ウィーク明け。週一回の朝礼の、今日はスペシャル・バージョン。言うなれば、俺のための集会だ。

うちの高校の体育館はちょっと変わっている。端っこに直方体の壇があるのではなく、真ん中に円台が迫り上がってきて、その台上に立つことになる。生徒は放射線状に、クラスごとに二列になって並んでいた。

とりあえず大きく手を振って、皆に答えてみる。

拍手はさらに大きくなり、俺と同じく壇上にいる五十代半ばのオジサン、もとい、校長は鼻血を吹き出さんばかりに上気した顔で、

「等々力君の設計した空き缶型のロケットが無事HⅡ―Aロケットから分離して、地上四百キロメートルでの点火に成功し……」

なんて、俺の手柄の紹介を始めた。

……こんなはずじゃなかったんだけどな。

俺は、ポリポリと鼻の脇を人差し指で掻いた。

気がつきや、校舎には垂れ幕が掛かり、それにはご丁寧にも

「祝・二年C組 等々力一起君の空き缶ロケット初飛行」

なんて書かれている。

垂れ幕なんて窓を塞いで邪魔だけじゃないか。目立ちすぎるんだよ。生徒の日照権はどうなる。

校長の話をつらつらと聞いていると、信じられないことを言いやがった。なんと、俺は二週間後に、もう一度この壇上に立って、全校生徒の前で武勇伝を話さなければならぬらしい。

「おいおいおい……何を話せて言うんだよ」

聞いてねえ。

俺は、なんとも決まらない表情をしていたと思う。

だって、設計したのは、俺じゃねえし。

驚いた？ 本当に、俺じゃねえんだよ。こーんなにヒーローみたいに称賛されちゃってるんだけどな。

俺はただ、言われるまま、ハンダ鋸でハンダをくつつけただけだ。

ああ、確かに『責任者として』種子島でのHⅡ―Aロケットの発射は見に行っただけ。

いやあ、壮観だった。腹の底どころか、脳髓を揺さぶり狂う轟音には参ったね。もう、ほんのちよつとで、物理的にも痺れそうだったよ。でも、それだけだ。

これじゃ、武勇伝どころか、ただの小学生の遠足の作文にしかならないことは間違いない。『僕の』ロケットに、宇宙空間でちゃんと点火できて良かったです』みたいな。いいのか、俺なんかに話をさせちゃったりして。どうなっても知らねえぞ。

2

そんな、俺の思いをよそに、校長の話は野を越え山越え、まだまだ果てしなく続く。

「等々力君は、お父さんがおうちを出て行かれた後も、ロケット開発に、その身を捧げ……」
なっ！ どさくさに紛れて、ひとんちの家庭の事情まで曝してんじゃねえっ！

誰か引きずり降ろしてでも、あのおっさんの話を止めてくれ。

俺は苛立ち紛れに、振り返って壇の下をちらりと見た。

俺のクラスはと……あ、あの辺だ。

「はっ？」

俺は見えてきた光景に、膝が崩れそうになった。

ありえねえ。

「ちっ、あの女、いやしねえじゃねえか」

俺をこんな目に遭わせた張本人は、まんまと朝礼をさぼっているらしく、姿がない。

何のためにここにいるんだか。

マジで帰ってえ。

「帰せ、帰せ。帰せ、帰せ」

と、呪詛のように腹の中で念じていたら、校長の話は唐突に終わった。

「等々力君の空き缶ロケットのレプリカは校長室の前に飾ってありますので、皆さん、ちゃんと見るように。本日の朝礼はここまで。解散」だつてさ。

だから、俺のじゃねえんだつて。

やれやれと、壇から降りようとしたら、校長に呼び止められた。

何？ 一緒に写真を撮ってくれ？

実はミーハーだったんだな、うちの校長。

「いやあ、ボク、おじさんと写真に写っても、嬉しくないんですケド」

なんて口が裂けても言えるはずもなく、二人で並ぶことに。

「はい、チーズ」

没個性的で超ありがちな掛け声と共に、パシャッと大きなストロボが光った。
なーんと、なんと、なんと。いまだき、銀板写真かよ。
絶滅したかと思つてたぜ。ちよつとは見直したかな？

3

俺以外の全校生徒の熱気の渦に押し流されるようにして、教室に到着する。
女の子特有の甘酸っぱい匂いが男どもの汗臭い匂いに混じつて、俺の鼻の奥をくすぐった。
ラッキーとか言つてる場合じゃねえ。

「なんだって？」

苦々しい思いで教室を覗くと、『それ』はいた。

何がって？

この騒ぎの張本人だ。ちなみに幼稚園からの幼馴染でもある。朝礼にも出ないで、こんなところにいるやがった。

やっぱ、匂いは嘘つかねえな。

「おい」

俺は両手を投げ出して机に突っ伏している小さな塊の肩を、いらいらと小突く。

「ほにやら〜ん」

なんとも間延びした声を出しながら、その生き物（メス）は顔を上げた。

こうやって、意味のあることを何にも喋らず、猫のようにうにやうにや言つてるだけなら、可愛いもんなんだがな。

背丈は、ちっこめ。茶色いふわふわカールの掛かった天然パーマが、バスト裏までたなびいている。

今は眠そうだが、ぱっちりなネコ目に、色白のなんとも頼りなげな風貌の顔がくつついている。

美少女っちゃあ、美少女だ。

忘れちゃいけない重要なポイントが、もう一つ。胸はちゃんと出っ張っているぞ。そうだ、出っ張っている。顔は幼く見えても、凹凸はしっかりあるほうだと思う。

「いるんじやねえか、美愛^{みあい}」

俺の幼馴染、初沢美愛は俺の追及には答えず、

「どうせ、朝礼に出ても、寝不足で後ろにふわあつていつて、保健室行きだよお。それなら、他人様に迷惑を掛けないように、おとなしく教室で寝てるほうがいいよお」

おいおいおい。なんちゅう理屈だ。

その『他人様の迷惑』に俺への迷惑は入ってねえのかよ。ついでに、なんでまた、寝不足なんだ。

突っ込みどころ満載だぜ。

俺は、かなり機嫌悪そうにしていたはずなのだが、美愛はお構いなしに俺の突っ込みをさらりとスル

ーすると、

「改めて……」と前置きしてから、

「よっ！」と挨拶をしてきやがった。ばっちりポーズも決まっている。

ポーズとは、片手を挙げて挨拶、なーんてありきたりなものではない。

まず、両手を開いて、薬指と小指を内側に曲げる。次に両手首を前に曲げて、左手を左頬の前、右手を胸の前に持つて行くという奇妙奇天烈な代物なのだ。まあ、ファンキーな幽霊に見えないこともない。

小学生の時に決めた俺たちの決まりごとらしい。だが、中学に入るとき美愛が何も言わずに俺の前から消えたときに、俺の頭はすっかり忘れちまったようだ。

高校で美愛に再会した時、もう一度、改めて奇妙奇天烈な挨拶を教え込まれた訳だが……美愛が中学一杯どこで何をしていたのかは、俺には未だ知らされていない。なんなんだかな。

いつの間にやら尻に敷かれているしさ。

「ふん」と俺は視線を逸らし、口の片端を釣り上げるだけだった。

誰が、つきあつてやるか。

「あああああああ。ふにやにやあん。いつ君のいけずう。挨拶は、人付き合いの基本だよおお。ほら、もう一回。ほら」

美愛は催促するように、カマキリにも見える両手をくいつと前に出して引っ込めた。
マジかよ。

俺がちゃんと挨拶するまで、全てがストップするのは目に見えている。

挨拶に「ごめん」は入らねーのか。もごもごもい。

心の中の叫びを無理やり押し込めると、俺は仕方なく、適当に美愛と同じポーズをした。

「よっ」

美愛は少々不満げに顔を顰めつつ、「足りない。右膝上げて、猫背にするのが本当なのに……」と呟きながらも、

「よっ！」

と、挨拶を返してきた。

美愛の顔にキラッと光る笑み。美愛の実態を何にも知らない男だったら、クリティカル・ショット間違いなしのキラッと光線になつていたらに違いない。

が、これで俺の追及を逃れられると思ったら、大間違いだぜ。

「なんで、寝不足なんだ。大体、誰のせいで、こんな目に俺が遭つちまつてると思つてんだよ？」

「こんな目？」

「こ・れ・だ！」

俺は、家から持ってきた新聞の社会面をブレザーの胸ポケットから取り出し、美愛の前に突きつけた。

『俺の』空き缶ロケットの記事と、俺の顔写真がでーんと載っている。

今朝、見た瞬間に、苦情を言つてやろうと持つてきていたのだ。何にもしてないにも等しいのに、有

名税だけ払うなんて、まっぴらだ。

もつとも、その時は美愛が朝礼すらサボると思っていなかったから、ここまで最悪の事態だとは思ってなかったけど。

「ああ、ふにやふにや、納得」

「誰が設計……」と俺が言いかけたところで、

「シャーラップ！」

と美愛のチョップが、俺のでこに刺さった。

……結構、いてえ。

眼の端に涙が滲んだね。

「それは、言っちゃだめだよお、いつ君。苦情は、また後で、ちゃあんと聞いてあげるから」

「俺は、今すぐ言いてえ。叫びてえ」

「聞きましえん。寝る」

言うなり、美愛はまたパタッと机に突っ伏した。

何それ。

4

俺には、ここで美愛に眠られては困ることがあった。

ノート。

これから始まる授業のノートを美愛に貸しっぱなしだったのだ。

「こら、美愛。リエンジニアリングのノート返せ」

美愛の座っている椅子の足を、爪先でゴンゴンと突つつく。

かなりの振動が美愛に伝わっているはずだった。

「ほにやらく。鞆の中に入ってるよお。持ってたて〜」

美愛は顔も上げずに、床に置いた鞆を指差した。

おいおいおい。健全な十六歳の男子に、年頃の女の鞆を漁れってか。

できる限り、必要以上の肉体的接触を控えているジェントルマンを気取る俺としては、ひっじょーに

精神的抵抗がある。

そもそも、普通、女の子の鞆の中って、あれやそれや何やらかにやらが潜んでいるもんじゃないのか？

下着の次にトップ・シークレットじゃないのか？

いいのかー、男に触らせて。

と思っ、ハタと手が止まった。

あ、こいつ、俺のこと、男と思っ、ってねーのか。

それで今までの数々の仕打ちがわかった。

……ちよつと、がつくし。

思わず首が、かくんと落ちた。

そりゃさあ、女子に会えば、百回に一回しか「かっこいい」って言われねえぜ。ちなみに、言っちゃまうと、残りの九十九回は「可愛い」だ。

俺は、男だつつうの。可愛いは絶対ないよな。まあ、つまるところ、そういう顔してるんだけどなあ。

背の順に並べば、一番前が指定席。でもよお、美愛よりはでかいんだぜ。

手だって人並みに大きいのによお。あーあ。

と自虐モードの底なし沼に、腰までどっぷりと浸かりつつ、俺は美愛の鞆を開けた。

ぱかつ。

「あ……」

俺は開けて納得した。

安堵とも消沈ともとれる細い息が、俺の口から洩れる。

そりゃ、いいっていうわけだ。

さっきの被害妄想は、保留ってとこだな。

だってよ、美愛の鞆の中には、俺のノートと、ちっこい親指サイズの黒猫のぬいぐるみ以外なーんにも入ってなかったんだ。

今日の授業、ノートなしで、どうすんの？

挨拶に「ありがとう」とか「ごめんね」とかいう言葉は入らないのかという、非常に正しい（と、俺は思っている）突っ込みをぶちぶちと吹きながら、ノートを取り出した。

ささやかな嫌がらせに、猫も誘拐しておく。ズボンのポケットに突っ込んでおいた。

ふん。ちよつとは思いい知れってんだ。

と思つたところで、何となく後味の悪さを感じた。

どんな理由があれ、俺のしていることは、盗みだ。

だからって、このまま何もしないで、「はい、どーも」とノートだけ貰っていくわけにはいかねえ。

俺はしぶしぶ、昨日の夜、携帯につけたばかりのアメコミ風マッチョな体の清涼飲料水のキャラクターのストラップを、猫の代わりに放り込んでおいてやった。

ちよつとは驚きやがれ。こんちくしよお。

リエンジニアリングの三十代に入ったばかりの女の教師が、教室に入ってくる。

とつとと席に着かねえと、うるせえんだ、これが。

俺は文句を言われる前に、さっさと自分の席に着いて、さっき回収したばかりのノートを開いた。

ったく、毎度毎度ご丁寧に……。

案の定、俺のノートは『授業欠席した』もしくは『睡眠欠席した』やつに貸したとは思えないほどに、美しく補完されていた。

俺がうっかり寝て空白のところは必ず埋まっているし、理解不足っぽいなあと自分でも思っているところには、見透かしたようにご丁寧な注釈が入っている。

俺のノートの続きに書いてあるメモが授業の次の回の内容とドンピシャリ、なんて展開はまあ、もう、毎回のことだった。

そういう訳わからん芸当をする女が、美愛だった。

なーんのために、この学校に来てるのかね？

美愛はいつもいつも、寝てるか、いないか、しかしない。

高校になって再会したら、美愛にはわからない部分がうじゃうじゃとくっついていた。

何してんだ、普段？

そんな実情も知らねえんだ。あー、なんだかムカつく。

机を抱きしめながら、大爆睡中の小さな背中を俺は恨めしい思いで眺めた。

キミは暢気だねえ。いいご身分だねえ。けっ！

俺の思いを知ってか知らずか、これまたタイミング良く、ぴごととかいう怪しい寝言を発して、美愛の肩が揺れる。

なっ！ なんちゅう音だ。ちよつとびっくりしたぞ。

寝ながらも、おちよくってやがる。

少なくとも俺の目にはそう見えた。いや、そうに違いない。

そういうことばかりしていると、いつか先生の集団に取り囲まれて、刺されるぞ。

「等々力君」

物思いに耽っていたら、突然、先生のご指名が。

「今日のヒーローに、続きを読んでもらいますよう」

がっ！ 続きってなんですかっ！ ヒ、ヒーローって！

ったく、ロケットの製作者は俺じゃねえのに、こんな迷惑、要らねえんだよ！

5

結局、午前中のどの授業も『ちょっと目立った』というクダラナイ理由でご指名を受け続け、昼飯時になった。どいつもこいつも、俺に絡みたいからって、素直じゃねえんだから。

俺は急いで、パソコン・ルームに走る。

今日は叔父さん、詳しくは母さんの弟、とテレビ電話の繋がる日なんだ。

通信回線は一種の資源だ。ましてや、宇宙ステーションからの回線なんて、とてつもなく貴重だ。遅

刻なんかして、割り当ての十五分をみすみす減らしたくなかった。

ひとクラス分が並んでいるマシンの中の手近な一台に俺は座って、通信アプリケーションを立ち上げた。

「よお、一起」

モニターに映る叔父さんは地上で見るとよりも顔が膨れていた。いわゆるムーン・フェイスというやつだ。

元々は目鼻のぱっちりした彫りの深い四角い縄文顔をしているから、ちよつと印象が違う。体格のいい、四角い体に入った宇宙服の向こう側に、無機的にしつらえられた宇宙ステーションの内装が見える。

叔父さんは分刻みの忙しい仕事をしているはずなのに、そんな様子は見せないで、いつでも回線を俺に回してくれている。

「お前のドキヤちゃん号、ステーションの望遠鏡で観測できたぞ」

ドキヤちゃん号つてのは、美愛の設計して俺が片棒担がされたロケット衛星の愛称だ。

どんなセンスしてんだろうな。付けたのは、美愛だけどき。

あんまりにもひどいんで、どの報道機関もスルーしやがった、いわくつきの名前。

「えっ、まじっ！」

俺のじゃないけど、やっぱりなんかすげー嬉しい。

マジで宇宙にドキヤちゃん号がいるんだって実感がわく。

「言ってた軌道と、ドンピシャリだったぞ。写真は撮ったから、後で送っておいてやる。で、どうだ、調子は？」

叔父さんは、にやりと笑うと、

「尻に敷かれっぱなしか？」

何、そのカウンター・パンチ。

「なっ！俺なんか構ってないで、叔父さんこそ、回線、女に使えばいいじゃんよ」

「言われんでも、使っとるわいっ！」

「ううう」

なんか裏切られた気分だ。すげー感謝してたのによ。

俺の不満げな表情が、顔に出たらしい。

「というのは、まあ冗談で。実際、ほとんどおまえに使ってるなあ。なんだ、ん？そんなに寂しかったのか？」

叔父さんは最後のところだけ、面白がるような顔をした。

「べっ、別に、そんなんじゃないよ」

寂しいとかいうなよ。なんでそうなるんだ。こっばずかしい。俺は子供じゃないんだ。

俺は、慌てて否定する。

「ん？そうか？」

叔父さんは、まだまだやめない。なんだか妙に楽しそうだ。三十代半ばのいい年したオジサンなはずなのに、顔がキラキラ輝いちまっている。

こりや、だめだ。お手上げ。

ともかくにも、話題を変えてえ。

落ちつかねえんだよ。

俺がそもそもどう思ったのかをきっちり遡って言わないと無理そうだな。

本当のことを言わないと、説得力がないから、ちゃんと言ったさ。

「ただ、俺のせいで叔父さんフラれちゃったら、悪いしさ」

「それは一大事だが、ちゃんと別の方法でフォローしてるさ」

思ったより、あっさり叔父さんは俺の話に乗ってくれた。

無事脱出。セーフ。

「へえ」

「それよりは、おまえの教育だ」

「へ？」

そんな話、聞いた覚えがないぞ。なんだ、突然？

そんなそぶり、今まで一度もなかったじゃねえか。『めえばちくり』とは、このことを言うと思うね。

「叔父さんが？」

突然、叔父さんは慌てたようになって、

「あいや、そりや、まあ、ほら、そんなことはともかく……最近、何かいいことあったか？」

なんだ、その無理くりとしか言いようのない話題の転換は……さては……だな。

そうはさせるか。全部、洗いざらい吐かせたれ。

「かあさんに、何か言われたんだろ」

「うぐっ」

叔父さん、途端に口の端をびくびくさせ始めてやんの。

ばーればれだつっの。にやり。

「叔父さん、『よく』緒にいるから見張って頂戴」とか言われてるんだろ」

「あ、いや、その……」

「んで、叔父さん、今みたいになって、断れなかったんだろ。かあさん、きつついもんな」

「あ、いや、その……ま、そんなところだ」

「そんなに表情に出して、よく宇宙飛行士なんて、やってられるね。協調性が大事なんだろ？」

「ほっとけ。しかし、真面目な話、どうなんだ？」

「何が？」

「だからさ。お前の親父さんみたいに、戦いに熱くならないか、ってことだ」

ガタン！

俺は思わず椅子から立ち上がり、声を荒げた。

「あいつと俺は違うよっ！ 最近、俺、殴り合いのケンカとか、してねえし、そういうのしたくてたまらねえってことも全然ねえし！ あいつと俺を一緒にすんな！」

「おうおう。そうか。それならいい」

俺の口からは立て板に水を流すかのように、ツルツルと言葉が叩き出してくる。

止まらねえ。

「あんな戦争バカとは俺は、違うんだ！ あんなのみたいには断固ならない！ 絶対にならない！ 戦争を取って、俺たちを置いて行ったようなバカとは違うんだっ！ 俺は血を見て興奮なんかしない！」

「わかったわかった」

「あ……」

俺が次の言葉を続けようとする前に、叔父さんは制するように、片手を挙げて、掌をこちらに見せた。

おととと……この話題は終了って意味だ。

うちの家では、このサインが出ると、いったん全てがストップする。どんな怒鳴り合いの最中でもだ。どこにでもある、協定サインってやつだよ。ほとんど、俺を止めるためだけに、みんな使ってるような気がするけどな。

俺は次の言葉を、必死の思いで飲み込む。

息を大きく吸って吐いて、自分の次のアクションを止めようとした。

まあ、なんとか成功した。

「お前の気持ちは分かった。悪かったよ。ちよつとは安心したかな。んで、最近、いいことあったか？」と、話題を振られて、俺はようやく思い出した。

手の中に握っていた小さな包みを開く。

「新しいの、見つけたんだ」

「おっ！ 灯台か」

叔父さんはモニターの中で、とたんに相好を崩した。

実は、俺と叔父さんはおんなじ趣味を持っている。外国の灯台はすごい。日本のは真っ白で形が決まっちゃまっているが、外国のは形も大きさも様々。風景と相まって、美しいったらありゃしない。

二人ともすごい数の世界中の灯台の模型を持っていて、二人で外国の灯台巡りをしたこともあるくらいだ。

「早く見せてくれよ」

「うん」

俺は、そっと被せていた手をどけた。

「ジャーン」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

叔父さんの顔が、どアップになる。

叔父さん、近づきすぎだつて。画面から顔が、はみ出てんじゃない。

俺の手にあったのは、世界中で一番美しいと俺と叔父さんが思っているトルバス灯台だったんだ。地中海のど真ん中の小島にある。

二千五百年前からあって、今の形になったのは、約千五百年前。獅子が立ち上がって、咆哮しているのが四頭。島の中央にある半径五十メートルのドーム型の屋根の建物の四方に立っている。

高さは、これまた五十メートルぐらい。獅子の開いた口から光が飛び出すことになってるんだ。

この方式だと、一つの塔で四方を照らすことができない。だから、四頭が揃って一つの灯台になる。

夜、遠くからこの灯台を見たときの光の様子は、他のと、はつきり違う。こんな灯台、世界のどこにもない。東ローマ帝国の人がどうやって石切り場のないこの場所に、これだけのものを作ったのか、未だに謎。歴史のミステリーってやつだ。

昔の人は、効率なんて気にしなかったのかな？ ある意味、今より贅沢だよな。とにかく、行くにや、辺鄙などところにあるが、いつか見に行きたいって約束している灯台の筆頭なんだ。

「もつと、よく見せてくれ……」

「うん」

俺がカメラに精巧な模型をそつと近付けようとしたとき、突然、モニターから通信画面が消えた。

同時に音声も途切れる。

「な、なんだよ、いいところぞつ！」

叔父さんとの通信時間は、あと五分も残っているはずだ。モニターの端に立ち上げてあるタイマーが、俺にはつきりと言っている。

俺はアプリケーションを再起動して、何度も何度も回線を繋ごうと試みた。

結果、全然ダメ。

マシンを変えたりして、トライしている間に、時間切れになっちまった。

なんなんだよなあ……今まで切れることなんて全然なかったのにさ。

あの下りでの切断だ。叔父さんが切ったつてことは絶対ない。それだけは確かだった。

叔父さんは、そんな人じゃない。

いいところに水を差されて、どこか、もやもやした気分で教室に戻ることになっちまった。授業、サボりてえ。

いつもまともに出てるし、今日ぐらいは、いっか。

美愛に渡すノートのことが一瞬ちらつと頭を横切った。でも、くしゃくしゃと丸めて、ポイした。

実はノートを写すにあたって、美愛に一つだけ厳重に言われていることがあった。

「先生の寒いギャグは、落とすな」

わけわかんねえ。アホか。

かくいう訳で、俺のノートは凍えそうなギャグのネタ帳とも化しているわけだが、今は一切そんなことに構っている気分じゃない。

ということで、教室に続く廊下を無視して、のろのろと階段を登りきると、そこは屋上だった。

あー、太陽が元気だねえ。今日も燦々と光ってくれちゃってるよ。
てか熱いんだよ。

俺は日陰を探して、ゴロリと仰向けになった。腹が減ったかも。弁当ぐらい食つとけば良かった。空
きつ腹を庇うように、自然と横向きになる。

ん？ なんだ？

見慣れないロープが、上向きに伸びていた。

俺はそのロープに視線を伝わせて、上を見る。

視線の辿り着いた先には、赤くて丸いアドバルーンが浮いていた。

なんだ、ありゃ。いつから、学校は商業施設になったんだ？

バルーンの下には何やら、文字の書いてあるものが垂れ下がっている。

なにになに？

「祝・二年C組 等々力一起君の……（以下省略）」だとき。

……無言。

見なかったことにしてえ。

つまるところ、校舎の壁にぶら下がっている垂れ幕と全く同じ文字が、ひらひらと風に踊っているってことだ。

「あー、何つうかなあ」

念には念のこもっていることぞ。

こんなもん、要らねえつつうの。

6

「よっ！」

俺が屋上で惰眠を貪り始めるとすぐに、脇腹を突つかれる感触で目が覚めた。

嗅ぎ慣れた女の子の甘い匂いに、気がつく。

「んだよ、美愛」

「あー、サボりだあー。先生に言いつけちゃうぞお」

「いつもサボっている奴に、言われたかねーよ」

「ふにやらく。私は、いっつもサボってるから、目立たないんだよお。いっ君は、たまにだから、言わ

れるよお」

いつもながら、なんだ、その理屈。

「そういう問題かよ」

「ほら、あいさつう。ふにやらくん」

またかよ。挨拶なんぞは一日一回で十分だろうに。

「ほら、ほら」

美愛はカマキリみたいに両手をくいつと突き出して、俺に催促する。

椅子に座っているときは違つて、美愛は猫背になって、片足を上げていた。正式スタイル。

俺、寝転がってんだけどさあ。

だからって、許しちゃくれねえだろうな。

なんで、こんなに美愛の奴は、この挨拶にこだわるんだ。

俺は、しょうがなく寝転がったままで、もぞもぞと美愛と同じポーズをした。地面に引っくり返つて
とるポーズは、笑えるに違いなかった。はああ。みつともねえ。

「よっ！」

「よろしいっ！ ふにやあ。んで、どうしちゃったんだーい？ おねーさんに言ってみよおよお」

いつから、俺のねーさんになったんだ。

美愛はこういうときだけ、なぜか勘良く、俺のそばに来る。

俺はアヒル口になりながら、下唇を軽く噛んで、

「回線が切れた」とだけ言った。

「ほにやらく。その様子だと、一回切れただけじゃなかったんだねえ」

「まあな。一回切れて、もう繋がらなかった」

「叔父さんラブな、いつ君には、つらい出来事だねえ。ほにやあ」

美愛はまるで夢見るかのような口調で、わざとらしく両手を頬に当てながら、とんでもないことを言
い出しやがった。

「叔父さんラブとか言うな。こっぱずかしい」

何言い出すんだ。何のプレイだよ、そりゃ。

あ、もおっ！ 背中がぞわぞわしてきやがった！

「叔父さんラブは叔父さんラブだよお」

「んがぁ！」

俺はたまらなくなって、つい吠えちまった。

美愛は笑いながら、上半身をくるりとひねって、顔をそむける。

でも、そんなんで引き下がる美愛ではない。

美愛はそむけた体はそのまま、まるで大事なものを公開するような笑みを顔じゅうに浮かべて、
再びこっちを向いた。

「ああ、怒ったあ。でも、いつ君には他にもラブなものがあるもんねえ。ふにゆうう」

「わかってるよお」と言いたげに、首をうんうんと上下に振った。

何なんだ、そりや。俺にや、全然訳わかんねえよ。

「あああああ？ 喧嘩あ売ってんのか、こおら」

「こころもち、声が低くなる。美愛は唸るように威嚇する俺に構わず、

「べえつに売ってなんかないもんねえ。売るならすでに言っちゃってるよお」

「きやはあ」と言いながら、美愛はその場でくるりと回った。

スカートが心持ちふわりと広がり、裾が上がる。

おうふ！

俺は寝転がってるんだぞ。スカートの中、見えるじゃねえか。

普段ずっと隠れているものが、ちよこつと見えただけで、どうしてこうも、そそられるかね？

「あああ、いつ君のえつちい」

やっべ、顔に出たらしい。何にも言わないのに、見抜かれた。

「だーれが、おまえのなんかで、喜ぶかよっ！」

「ふうううん、へえええ、そういうことにしといてあげよう」

美愛はにまりと笑うと、そつとスカートの裾を上げようとした。

「あがあっ！」

俺は体に走りぬける衝動を隠したくて、ごろりと美愛の見えない反対側を向いた。

「そういうこと、すんな」

床を見ながらぼそりと言うと、

「うにやあ、ごめん」

珍しく素直に美愛が謝る。

なんか、変だぞ。いつもの小理屈は、どこへ行った？

俺が振り返ると、美愛は珍しく厳しい顔をして、携帯画面を見ていた。

「いつ君、いつ君の叔父さんとの回線が切れたの、これのせいかもしれないよお」

「あ？ なんだって？」

俺は飛びつくように起き上がると、美愛の携帯画面を覗き込んだ。

ニュースの動画が起動されていて、あろうことにか、通信衛星のブレイクアップを報じていた。

ブレイクアップとは、宇宙空間にある衛星が何かに衝突されたり、内部で爆発が起こったりして、粉

々に砕け散つちまう現象のことを言う。

アメリカの宇宙監視ネットワーク（SNN）が地上からの観測でずーっと見張っていたが、あるべき

大ききの衛星をロストしちまったらしい。綺麗に見えなくなったから、ブレイクアップだろうと。

ただ、何が原因で分解しちまったかまでは皆目わからないらしい。

「うわっっちゃあ」

よもや、そんな理由とは思わなかったぜ。

ぶっ壊れたのが、叔父さんのいる宇宙ステーションじゃなくて良かったよ。いや、マジで。

「デブリが当たったのかもしれないねえ。今頃、JAXAの人たち大騒ぎだよ」

デブリつつうのは、機能停止した衛星、分解しちゃった衛星の破片、ロケットを上げるときの不要になった部品、その他もろもろの、要するに宇宙のゴミだ。そんなんが、地球の衛星軌道をぐるぐる回っているわけだが。

人間の出没するところは、どこもかしこも、ゴミだらけだな。

「宇宙の話なんて、原因わかるのか？」

「ん、衛星に積んであるセンサーの記録を見て、爆発の兆候を示してなければ、衝突が原因ってところかなあ」

「でもさ、自動車事故で人間がブレイクアップなんて、聞いたことないぜ」

「なんか、不穏当な発言だよお、いっ君。それに、忘れちゃったの？ 地球を回っているゴミは時速四十キロメートルなんて、のんびりしてないんだよ。時速二十万キロメートルでぶつかったりするんだよお。小指の先ぐらいの破片だって、すごい威力なんだよお」

どばばばーん、なんて言いながら、美愛は両手を広げて走り回った。

あなた、小学生ですか。

「だって、実際にロケットの軌道計算したの、全部、美愛じゃん」

「あああああああ！」

美愛はピタッと止まると、この世の終わりかのような形相で俺を睨みつけた。

俺は何か、しくじったらしい。

「な、なんなんだよ」

「計算、チェックしてって言ったのに、しなかったんだあつ！」

やっべ、ばれた！

どうせ、俺なんかが見なくなっちゃって、美愛のことだ、間違えるわけがないじゃないか。

見るみるうちに美愛の顔が膨らんで、

「宇宙空間で迷子になったら、もう見つからないんだよお！ なんてことしてくれるの！ いっ君のバ

カバカバカ！」

美愛が俺の胸の辺りをボンボンと叩きまくる。

いてえよ。

「いやっ、一応、計算間違えだけは確かめた。確かめた」

嘘でもなんでも、言っておかねーとな。いつまでもしつこいぞお。

「大事な大事な、ダブルチェックをお……」

「いやだから……」

とりあえず取り繕おうとする俺の言葉には構わず、美愛は言いきった。

「いつ君の嘘は、顔に出る！」
ぐはっ！

どう反論していいのかわからねえ、突っ込みが。
完全に主観的じゃねえか。

エロ顔はばれても、嘘がばれるような、ちやちいことは断固しねーはずだぜっ！

「出てねえ」

「出てるう」

「出てねえってば」

このまま不毛な言い合いを永遠に続けるのかと思ったら、美愛は胸ポケットに手を突っ込むと、手鏡をばばーんと俺に向けた。

俺の顔を俺に見せるのかと思いきや、

「眼つぶしい！」

俺には、きらっと鏡が光ったのだけが見えた。

ま、眩しい……。

光をよけようと体を捻った瞬間、

「はい、負けえ。後ろめたい人は目を逸らすんだよお」

……この瞬間、正直、もう俺は、どうしても良くなった。

毎度毎度、何だよ、その理屈。

「どうせ、計算機の計算間違えを確認したんでしょお」

はい、ごもつとも。

って、ばればれじゃねえか！

今度は俺の顔に出た。バツチリ出た。

それは俺にも、よくわかった。

「機械が間違えるわけないだろがあっ！」

間髪を入れずに、美愛のでこチョップが炸裂した。

「いてえ」

何度くらくらしても涙が出るぜ。痛すぎるんだよ。ったく。

「反省しなさいねえ。悪事は顔に出るよお」

はいはいはい。

「ちゃんと覚えてるう？」

屋上での惰眠に戻ろうとした俺を、美愛が呼び止めた。

「んあ？」

何のことだろうと考えながら、何の気なしに俺は目をぐるりと回した。

「ああああああああああああああああああああああああああああああ！」

「な、なんだよっ！」

美愛の絶叫にまたもや、いやあな予感。

指摘される前に思い当たる節を思い出さねば。

是が非でもと、絶賛、真剣に考えてはみたものの。

……無理。

美愛の顔が見るみるうちに、じとーつと変形してきた。

タイムアップが近い。

とうとう美愛は、口先で呟いた。「パフェ」とー。

タイムアップ！

やっべーっ！ ものすんごくやべえ。

「あ、ああああああああ！ パフェッ！ あーっ！ あーっ！」

「信じられない。ふにゅあああ。忘れてるなんてえ」

「いや、覚えている。鳴門屋の三万円どでかパフェの日だった！」

「そう。美愛ちゃん、お誕生日おめでどう、あーんど、美愛ちゃんの設計したロケット大成功おめでと

うの会。ほにやらあん」

美愛は言いながら、鳴門屋の店頭に飾ってあるパフェを思い出したらしい。

顔がゆるんでいるぞ。目も、あらぬ方向を向いているし。

甘いもの好きだもんな。高級フルーツをふんだんに使ったパフェだもんな。

涎が垂れそうだぞ……っと、美愛のところが顔を眺めている間に、とうとう涎がぼたっと床に垂れた。

あーあ。せめて口についている分は、ちゃんと拭けっ！

これまた、なぜか理由はよくわからないが、毎年毎年、美愛の誕生日プレゼントを渡す羽目になって
いる。

毎年恒例の年中行事で、今さら「今年限りでやめます」なんて、言いづらい雰囲気があって、ずるず
ると続けているのだが……。

毎年、誕生日になると、来年の誕生日のお題が出る。美愛のほうもちゃんと心得たもので、まるで借
金の返済計画のように、俺がちよつと頑張れば達成できる金額の代物を要求してくる。

つまるところ、ま、俺の小遣いが上がるのに合わせて、確実に毎年、値段が上がるんだけどな。

そんなことは百歩譲っていいとしてもだ。まあ、いいんだ。

それよりも言いたいことは、他にある。

ロケットは、俺も関わったんだけどな。俺には何にもねえのかよ？

「ほにやあ。五時にMMVの前で待ち合わせねえ」
美愛は「ふにゆにゆにゆ」と笑いながら、スキップして出て行っちゃった。
MMVとは、駅前の大きなビルの名前だ。若者向けの洋服やら靴やら雑貨やらが入っている。
ちっ、勝手な奴。

ガチャツと音がして、校舎に入るドアが小さく開いた。

「いつ君、お弁当、置いとくねえ」

細い手が隙間から出て、俺の弁当箱を床にポンと置く。こ丁寧にお茶のパックまで加えられていた。
何か言うのかと思ったら、それきり何にも言わずに、ガチャンとドアがぶつきらぼうに閉まった。
最初から弁当を出せばいいのに、変な奴……。

さあて、静かになったことだし、とつとと飯でも食って、また寝ることにしようか。
にしても、大忙しな一日だぜ。

8

結局、俺は午後の授業をゼーんぶ、ぶつちぎって休んだ。ところが、なんと、掃除当番なんてものが、俺を待っていた。

こいつはサボると、クラスの友人関係に罅が入る。

そいつは何としても避けたい。今後の平和な学校生活のためにも。

美愛との待ち合わせの時間はまだ先だし、勤労しようじゃないか。

俺が素知らぬ顔で教室に戻って、モップを取り出そうとガコガコと掃除道具入れを開けていると、ピンポンパーンと放送が鳴った。

「二年C組の等々力一起君、校長室まで来てください。繰り返します……」

あ？ 何、校長室？ また写真か？

「なくなった？」

校長室のドアの前で、がっちり俺は、腕を掴まれた。見ると、校長だった。

写真を要求されると思った俺の予想に反して、校長の顔は青ざめ、右頬がびくびくと痙攣している。

ちよっと見ない間に、クマまでできてないか？

そーいやあ、校長室の前に『俺の』ロケットのレプリカと設計図が、置いてあるんだっけ。

まあ、フライト・モデルとは違う嘘っ子だけだな。

校長は、飾ってあるはずの机を指差した。

そこには丸く穴の空いたガラスケースがあるだけだった。

当然、中は空っぽ。

おおおう！ どこ行っちゃったんだ！

それより何より、あんなもん、誰が欲しがるんだあ？

俺なりに結論が知りたくて、ちょっと考えることにした。

中身を取るだけなら、ガラスケースを割りゃいいだけだ。

丸く切られたガラスの断面を見ると、何か工具で切ってあるみたいだった。

ご丁寧にも、よく窓から侵入するときに使うっていう、あれ使ったのか？ ということは、プロの作業？

確か、うちの学校、夜は入れないように、警備体制が敷かれるんだっけ。

それで、大胆にも人通りのある昼間を狙ったのか。

よっぽど慣れたやつがやったに違いない。まあ、プロなら十五秒で済む仕事だろうけどな。

でも、おもちやを狙うプロ？ どんな奴だ？

うにやうにやと脳味噌を挽肉のように捏ねくり回して考えてみたが、まったく思いつかねえ。

「あれ、動かないっすよ。持って行っても、意味ないっす」

俺は考えを中断させて、校長に慰めにもならない言葉を掛ける。

「誰がやったのやら、やったのやら……」

校長は、我が身が攫われたかのように、おろおろとしていた。

聞こえてるかあ？

「私は見ろとは言ったが、盗めとは言っていない。言っていない」

そりゃ、そうでしょうよ。俺も、確かに聞きました。

誰も校長のせいだとは言っていないし。

「とりあえず、警察にはちゃんと被害届を出すから、我慢してくれ。すまないね」

「はあ？」

校内に犯人がいるなら、そいつもすげー技を持つてるから、いっそ俺みたいに称賛してくれてやってもいいかもな。

……冗談だけだよ。

とにかく、なんだか、どうしようもない事件が起こったみたいだった。

通信衛星は爆発するし、『俺の』ロケット模型は盗まれちゃうし。

美愛に電話してみた。だけど、美愛の奴、電池を切ってるみたいで、繋がらなかった。さっき会ったばかりだったのによ。

ホント、あいつ、何やってるんだろ。

とりあえず現場の写真を携帯で撮ると、俺は立ち去った。

「まだかよ。ま、当たり前前っちゃあ、当たり前前」
午後四時四十五分。

俺は駅前のMMVの正面の壁に背を預けて立っていた。美愛との待ち合わせには、あと十五分ある。目の前のビルの壁面についている大きなテレビジョンを、見るともなしに見ていた。入れ替わり立ち替わり流れる、数多くのCM。

CMの流れるたった十五秒の間に、どれだけの人が見るのかはわからない。けれど、宣伝効果はあるんだろう。動いて音が流れるもんな。

と、突然、女物の化粧品CMの途中で、女優の顔がニュース・アウンサーの顔に切り替わった。画面の右上に《緊急報道》という文字が点滅している。左上には、通信衛星のイメージ画像が。

「なんだ？」

ニュース・キャスターは、こわばった顔で紙を持ち上げると、読み始めた。

「今日の昼頃、日本の通信衛星の一つが、通信を断ちました。衛星軌道上を周回するデブリと呼ばれる宇宙ゴミが当たったものだと考えられていましたが、先ほど犯人グループと思われる組織から、犯行声明が我々OXテレビに送りつけられてきました。OXテレビとしましては、犯行声明を読み上げたいと思います。以下、犯行声明です」

*

我々、天上の光は一部の裕福な国による通信回線の占有に対し、断固反対の立場をとるものとする。その行動の第一歩として、五月十六日日本時間午後零時十三分、衛星軌道上にある我々の所有の小型衛星を日本の通信衛星《ささやき》にぶつけることにより、これを破壊した。

これは、警告である。我々は、全ての衛星軌道上でケスラー・シンドロームを起こし、軌道を使用不能とすることができる。米宇宙監視ネットワーク、およびロシアの宇宙監視システムなどで観測不能な小型衛星が、すでに衛星軌道上に多数、上がっている。

直ちに、全衛星の大気圏再突入を要求する。一週間後、五月二十三日世界標準時零時に我々の所有する小型衛星を他の所属の衛星にぶつけるものとする。以上だ。

*

「これで全てです。繰り返します……」

は？ これって、さつき屋上で美愛に見せてもらったニュースの、続きだよな。

ぶつけた？ うっかり間違っつてぶつかったんじゃねえのかよ。

事故じゃなくて、事件か。話が全然ちげーじゃねえか。

とりあえず、天上の光だかなんだかつちゅう団体さんが、俺と叔父さんの通信をぶっちぎりやがった

ことだけは、わかった。

でも、短いニュースでもわかんねえことは、沢山ある。

ケスラー・シンドロームって？ 観測不能な小型衛星？ 宇宙に上がっている全部の衛星が、落ちる？

何のこっちゃ？

美愛がいれば、ちよつとはわかりそうなものにな。生憎と、いやしねえ。

ま、お偉いさん連中が、何とか対処するんだろ？

叔父さんとの貴重な通信をぶった切りやがった、むかつく野郎どもだとは思ったが、まさか俺が関わらなくて、思ってもいなかった。

あ、解説員とかいう奴が出てきて、解説してる。

なにになに？ 十センチメートル以下の物体は地上からの観測では捕捉できない？ だから、先日、成功した高校生、等々力君（つまり、俺だ）の衛星みたいなのを、いつの間にかたくさん上げられていたとしても、電波などが出ていない限り把握できないだと……？

おいっ！ だから俺じゃねえって！ 宣伝すんなっ！

『俺の』は、ちゃんとビーコン出してるぜ。俺（衛星）は、ここにいるぜえってなっ！

俺は気持ち悪くなって、立ち去ろうとした。

あ、美愛との待ち合わせ、ここじゃねえか。動けねえ。最悪。

それはともかくとして……。

じゃあ、伏兵つつうか、ミサイルつつうかが、たくさん宇宙に上がっているということじゃないか。

やっべー状態って言わね？

ん？ ちよつと待て。

あ。なあんだ、空き缶サイズのロケットって、俺たちが世界初じゃなかったのか。やったことは、まあ、高校生にしちゃ、僥倖だけだな。

あ、そうだ。ケスラー・シンドロームってのは、ある一定以上の数のデブリが衛星軌道に上がっちゃうと、どんどん数が増えて行ってしまう現象のことらしい。

つまり、衝突が起っちゃまって、飛散した部品やら破片やらがまた別のデブリにぶつかると、また飛散してデブリの量が倍数的に増える。

デブリの数が少なけりゃ、次の衝突は起こらんけども、デブリが増えてくると連鎖的に衝突が起きて、デブリの数が永遠に増えて行くって寸法だ。

これが起こっちゃまうと、デブリの数が多すぎて、せつかく人工衛星を上げても、すぐぶつかってお陀仏だ。結果として、その軌道は使えなくなっちゃまう、って展開らしい。

世界中が宥めすかして軌道を使っている中で、そんなこと勝手にされたら困っちゃまう。

今、上がってるのは、通信衛星だろ。GPSだろ。気象に交通に放送に軍事。

ま、軍事衛星はどうでもいいけど、ちよつと数え上げただけで、いろんなシステムがストップするってことじゃねえかよ。

ともかくにも、自分勝手に迷惑な奴らだ。
はつきり言やあ、壊すのって簡単なんだよ。俺の言えることじゃないが、そういうのは能なしのやることだ。ぜってえ、そうだ。

2

おっせえなあ。

時刻は、もうすぐ五時。そろそろ美愛が現れてもいい頃だ。

街頭のテレビ画面は繰り返し、犯行声明と解説が流れている。おかげで、復習は、ばっちりだぜっ！
とりあえず、携帯画面でメール・チェックすることにする。

折り畳み式の携帯電話をぱかっと開いたところで、俺の周囲に人だかりができた。

目ざとく見つけた、俺のファンか？

俺が顔を上げると、両脇腹に何か固いものが、ぐいっと押しつけられた。

なっ、何だ？

はつきり言つて、俺は油断していたと思う。

あっさり、こんな奴らに取り囲まれるなんて。

「製作者だな？」

俺の前にいる三人の男は、どう見ても日本人ではなかった。色の濃い、彫りの深い顔立ち。口周りには髭をもつさり生やしている。

中央にいる男は仕立ての良さそうな背広を着て、縁のない眼鏡を掛けていた。インテリか？ 成金の
ような趣味の悪さは感じられない。

残りの二人は野球帽を深く被っていた。二人ともカジュアルなポロシャツを着て、ジーパンを穿いて
いる。

三人ともに言えることは、有無を言わさぬヤバイ雰囲気の間つきをしている、という事実だった。
まじい。

宝の山をくれると言つても、よけて通らせてもらうのが最善手としか思えないようなやつらだった。
ともかくにも、俺の脇腹のは何なんだ。

鉛玉だのレーザーが飛び出す奴じゃねえだろうな。

「は？ 何のことですか？」

とりあえず、ちゃんととぼけないとな。とつととお引き取り願わねえと。

「アレダ」

「あれ？」

右手にいた男が遠くを指差す。

え。あれは……。

俺は思わず舌打ちしそうになった。

男の指した先には俺の高校の屋上から上がっている赤いアドバルーンが遠くに見える。

ったく、なんで、あんなもんがあるんだよ。こんなとこまできて、足引つ張んじゃねえよ。

俺は今さらながらに、もう一度、腹が立ってきた。

さらにとぼけようとする俺を制して、左側の男が苛々したように、

「ロケットダ」と、脇腹のものを、さらにぐいぐい押しつけた。いてえ。

とりあえず、その物騒そうなものを引っ返めてもらいたい。

「いや、知らないっすね」

何が何でもとぼけきるまでだ。ま、俺じゃないのは本当だし。

俺が腹を決めたところで、ぱっと街頭テレビの画面が変わった。

テレビのアナウンサーが、やけに落ち着いた口調で、

「今回の不審な小型衛星に近いと考えられる、高校生開発者、等々力君の空き缶型衛星について、検証しましょう」

なんて、言いやがったんだ。

なっ！ このタイミングで？ そりゃねえだろう。俺がこんなに必死でとぼけているまっ最中にさ。

なんて真似してくれるんだ。

んで、街頭テレビに出ちまった。

何がって？ 俺の顔写真がさ。これまた暢気に大口を開けて、笑ってやがる。

なんてこったい。完全にチェックメイトだ。

俺を囲んでいる奴らは、トドロキの言葉に、当たり前のように反応した。

最初から俺の名前を聞いとけばいいのにさ。

んなことはともかく、やつらは俺の顔写真をしつかり、ばっちり見ることになる。

「嘘をつくな」

真ん中の男が鼻で笑いながら、笑った顔はそのまま、間髪を入れずに、俺の腹に蹴りを入れてきやがった。

ゲホッ！ ゴホッ！

俺は思わず歯を食いしばって、前屈みになる。

半端ねえ痛さだ。……にやろう。

俺の体の中にあちこちに、沸々と滾るものが発生してきているのが分かった。

まじい。爆発させちまったら、親父あいつと同じになっちまう。

抑えろ。抑えるんだっ！

だけど、葛藤しながらも、頭の芯がすっと冷静になりつつある俺がいた。

なんだ？ なんだ、この感じ？

真ん中の男は戸惑う俺を知ってか知らずか、人差し指を一本すいと立てた。

「良い目だ。さっきとまるで違う。とっととやれ。嘘の代償は払ってもらおう」
嘘じゃねえんだけどな。

だからって、本当のこと言ってやるつもりもないけどさ。

両側にいた男たちは真ん中の男に言われるがままに、両脇腹に押しつけていたもので俺の側頭部を、上からぶん殴りやがった。

にやりとぐらい笑って返してやりたかったぜ。

暗転する視界の中で、車の止まる音とドアの開く音だけが聞こえていた。

畜生。

3

二〇一X年五月一六日？時@どこだよ、どこ？

「起きろ」

俺は背中を蹴飛ばされて、目が覚めた。

いてえ。誰だ？ もっと大事に扱いやがれ。

目を開けたところで、俺はMMVの前での経緯を思い出した。

俺は、コンクリート打ちっ放しの床に転がされている。

倉庫か？ そんなに広くねえかも。

ここがどこだか知らんが、俺は無理やり連れてこられたらしい。

体を起こそうと思って、思ったように体が動かないことに気がついた。

手が後ろ手に回されて縛られている。

と思ったら、両足首もしっかりと縛られていた。

ボク、縛られる趣味はないんですケド。

「嘘つき。嘘つきには嘘つきなりの扱いがある。覚悟しとけ」

んあ？ 誰だ？ 俺が風上にいちまっちゃ、匂いがわからねえ。

芋虫のように体を回して、声のほうを見ると、さっき俺に蹴りをかましてくれたスーツ姿のおっさんがいた。

三十代半ばか？ 言葉は軽いのに、妙に目が冷たい。俺には気になって、どうにも落ち着けなかった。

どんな奴なんだ？

おっさんの後ろに、貧乏そうな事務椅子に座った女がいることに気がついた。

「ここは、どこだよ？ これを外せよ」

おっさんは舌打ちをすると、

「喋ろとは言っていない」

そこでまた、俺の腹を蹴った。MMVの前で蹴られた所と、どんぴしゃり、同じ所だった。強烈にいてえ。

ごほっ、ごほっ。

胃液が上がってきた。吐きそうになる。

こんにやろう。

またもや、頭に血が上がってきた。しかし、暴れようにも、こう縛られちゃあ、何にもできねえ。

しょうがないから、俺は叫ぶことにした。

「何しやがんだっ！」

「この方が、お前に用事があるそうだ」

おっさんは意外なことに俺に何もせず、後ろに座っていた女を掌で指差した。

うおっ！ 布がちいせえ。

太ももぎりぎりの黒のミニスカートに、肩の大きく出た、柔らかそうな素材のピンクのフリルのシャツ。

ボンキュツ、ボンの凹凸が目眩しいぜっ。

真っ白い肌が、これでもか、というくらい派手に、はみ出していた。

白人なんだろうな。

真黒い髪を後ろで束ね、きつつい毗が俺を見ていた。お約束通りの美人だ。鼻ぺっちゃん、ということはない。なんだって、白人だからな。背もでっかい。

どう見ても二十代半ば、いや、前半に見える。

おねえさん、ボクに用事って、何ですかっ！

俺は、もざりもざりと、おねえさんの足元に這って行こうとした。

おねえさんは、きつつい顔のまま、俺のところまで歩いてきた。俺の前でしゃがみ込んで、俺の顔をまじまじと見る。

スカートの奥は、絶妙に交差した太ももでガッチリとブロックされていた。ところが、おねえさんが俺を覗き込もうと体を倒した瞬間、至福の光景が現れた。

ゆったりした襟ぐりが重力に従って下に垂れさがり、ふくよかな生乳の谷間が、俺の目に飛び込んできやがったんだ。

な、なまちち……。

こ、これは、もしや、ノーブラというものかっ？

若い煩惱が、頭の中でスパークする。

俺は自分の置かれている立場をすっかり忘れて、谷間の先にある二つの突起を覗き込もうとしていた。

おねえさんは俺の視線を躲すように立ち上がると、

「なんで、キティじゃないのよっ！」

と、突然、意味不明なことを怒鳴った。

は？

日本の国民的猫（便利じゃないほう）のことか？ 今、おねえさん、英語だったから、子猫って意味の普通名詞かもしれない。

ボク、人間ですケド。

「せつかく、日本なんてド田舎島国に来たと思ったら、なんでこんなの相手しなきゃなんないのよっ！」おねえさんは、何がご不満なのか、よくわからんが、とりあえず俺がお気に召さなかったらしい。

とても汚い四文字のスラングを間に挟みながら、おねえさんはぶち切れている。

おねえさんは、まるでばつちい物を見るかのような視線を俺にくれながら、

「どうやって作ったのよ」

「いや、何のことっすか？」

「可愛くないっ！ 可愛くないっ！」

はああ？ 可愛いとか、可愛くないとかの問題か？

俺、何しに、ここにいんの？ 全く意味が分からん。

「ふざけんじゃないわよっ！ あんたが、あんなもん作ったおかげで、あたしはここまで来たってえの！」

おねえさん、口悪いデスヨ。

「んで、あんたが相手っ！ キティじゃないっ！」

「あのを、子猫って何すか？」

話わかんねえのはムカつくんだよっ！

「はっ？ 子猫は子猫よ」

「はっ？」は、こつちのセリフだ。全く意味が分かんねえし。

それまで静観していたスーツ姿の男が、一言、

「ドクター・ファイアントは、女の人しか興味がないのだ。しかも、興味がないものと関わるのが大嫌いでもあるんだ」

なっ！ って、ことは、子猫Ⅱ女の子ですかっ！

か、完全に、アウェイだ。

俺は男というだけで、このおねえさんから、忌み嫌われなければならないらしい。

俺の『女の人に媚を売って、ムハムハ体験、アソビド、助っ人大作戦』は、脆くも崩れ去っちゃった。

男が言っても、うすら笑っちゃう言葉なのに、女の人にこうも堂々と言われちゃうとはね。

個人的な趣向をどうこう言うつもりはない。とはいえ、今回ばかりは参っちゃまう。

必要以上のつら〜い場面があることを、俺は静かに覚悟した。

ううう。

「んで、どうやって作ったのよ！」

おねえさんは俺の脚を、がらがん蹴っ飛ばす。

だから、いてえって。女相手だから、いまいち気合が入らねえんだよ。

「知らないっす」

「レプリカは、ただの箱だったし。設計図は重要なところが、うまく抜けている」

へえ、美愛の奴、そんなことしてたのか。

機密保持ってやつだな。そういやあ、特許まだ取ってないし。

ほうほう、それで俺が盗まれたってことか。

って、洒落にならねえじゃねえかよっ！

やっぱり、美愛は疫病神だ。もう決まった。間違いない。前々から、うつすらそうじゃないかと疑っ

てはいたけど、本物だったとはよ。

スーツ姿の男が、俺の目の前に校長室の前で飾っていた嘘っ子のレプリカのロケットを、ポンと放り投げた。

嘘っ子レプリカは、パキカンカンと軽薄な金属の音を立てながら、俺のほうに転がってきた。胴の部分が、ぐしやりと潰されている。

げっ。マジでこんなところにあつたのかよ。しかも、ぶっ壊れてるぞ。ひっでえ。

てか、盗んだのは、やっぱりお前らかっ！ どうりで、プロの手腕だと思っただぜ。

ったく、ふざけた野郎どもだ。

とりあえず、俺ともども、早く返してくんないかな。

……んなわけねえか。がつくし。

「そんなことするなんて、よっぽど何か隠すものがあつたとしか思えないのよ。しやらくさいったらならん」

「知らねえ」

だから、俺じゃねえって！

「とつとと喋っちまえつつうの。そうすりゃ、あたしは、あんたの相手なんかしないで済むのよ。やるべきことが他にあるのよっ！ 早く帰んなきゃっ！」

おねえさんは、汚いものを触るかのように、俺の脚をぐりぐりとヒールの先でねじってくれる。

痛いんだけど、まあ、そうされてもなあ。言えないことつてもものもあるわけで。

帰りたいのは俺のほうだし。

俺は、アルカイツク・スマイルでも浮かべておいてやることにした。

「ちっ」

おねえさんは何かを考えるかのように、ぱりっと人差し指の爪を噛むと、

「じゃ、取引してあげるわ」

「取引？」

「そう、欲しいものを一つ選ばせてあげる。その代わり、情報を教えなさい」
へえ、そう来たか。

欲しいものは何でもくれるってことか。

今まで、俺のこと散々と蹴飛ばしたりなんんだり、オチヨクってくれたからな。
ちよつと嫌がらせをしてやるうじゃねえか。

「じゃあ、見せてよ」

「何を」

「おっぱい」

ふん、男嫌いなら、男なんぞに見せるのも、めちやくちや嫌だろうよ。

別に嫌がらせになるなら、何でも良かったんだ。

とりあえず、さつき見た至福の光景が頭をよぎっちまっただけで。

おねえさんは、一瞬の沈黙ののち、こらえきれないように、ぷつと吹き出すと、

「命は要らない。要らないってさ」

と、腹を抱えて笑い始めた。

「ばーか」

と、これはスーツ姿の男。

なんだったって？

俺は事態を理解するのに、たっぷり十秒は掛かったね。

命ごいの場面だったのかよっ！ まさかの、まさかっ！

理解した途端に、どつと押し寄せてくる焦燥感。

やべえ、これは超やべえ。

まさか、すでに持つてるものを要求するなんて、思わねえじゃねえか。

ってことは、だよ。よしんば、模範回答通りに「命をください」って言ったらば、腕か足の一本や二本がなくなっちまっても文句は言えないって話かよ。

ふざけんじゃねえ。取引に乗ったもんが必ず負ける、悪魔の取引じゃねえか。

あっけなく騙されちまった。畜生。

「あんたが死んだ後で、あんたの目を開かせて、存分におっぱい、見せてあげるわ。いひやひやひやひや。あたしの、とつても綺麗よお」

コン畜生。

糞つたれ女は手を上に上げて、くるくる回りながら、

「殺れる♪ 殺れる♪ 合意の上の殺人よ♪ さいっこう、ひやつほう！ あんた、すげーいける」

なんて、妙な節をつけて歌っている。

「じゃ、始まりだ。口を割るまで続けるぞ」

スーツ姿の男が、がんがん尻を蹴飛ばしてきた。

糞つたれ何とか博士も、俺の腹に遠慮なく、どすんどすん蹴りを突っ込んでくれる。威力は男よりもないが、靴が尖っているだけ陰險なんだよ。

俺は、必死になって考えたね。

可能性は低くても、手持ちの札の中で最も成功確率の高い方法を。

それが、たった一つの俺の助かる方法に違いない。

それは、俺の持っている携帯電話。

電源が入っている。ということは、今どきの携帯だ。GPSなんていう神的なアイテムが付いている。

俺の携帯の発する電波を、どこかのアンテナで拾ってくれているはずだ。てーと、俺の場所もわかるはず。

よくニュースとかでやってるみたいに、警察が気づいてくれれば……。

つと、そこまで考えて、ハタと気がついた。

……そもそも、俺が誘拐されたって、知ってるのか？

一番に気がつくとしたら、美愛。待ち合わせしてたからな。

こんなときになって、ちよつとあいつの顔が見たくなっちゃった。

疫病神なのにな。

すんげー遠くにいるように思える。

もう会えないのかな？

畜生。なんという弱気。

とにかく、携帯だ。携帯でわかるはずだ。それに懸けよう。

つまるところは、耐久戦だな。耐えるしかねえのか。

……でもさ、こんな旋破りな奴ら相手に、保つかな、俺？

「どうせ、やわなジャパニーズ・ボーイだ。すぐに口割るか、くったり行っちゃまうかの、どっちかだぜ」
だつてさ。いよいよ、自信なくなってきた。

「言え」

「知らねえ」

どかばきぐしや。

ぐげえ。

「言え」

「知らねえ」

どかばきぐしや。

延々『以下続く』を十何回か繰り返したところで、女が痺れを切らしたようだった。

突然、俺の髪の毛を掴むと、どこから持ってきたのか、水の張った盥に俺の顔をぶち込みやがった。

ぶぐぶぐぶぐぶぐ……ぐるじい。

顔を上げたくても、顔は力いっぱい抑えつけられていて、上げようもない。俺は蹴られ続けて、ぜいと大きく息を吸わなきゃならない状態だ。

すぐに気が遠くなりそうになる。意識が暗転しかけたところで、見計らったように洗面器から顔を上げられた。

ぶはあつ。

ここぞとばかりに、息を吸う。

「言いなさいよ」

言えれば、とっくの昔に言っている。

言えねえから、言えねえんだよ。

何のために、美愛が俺を表向き設計者にしたのかは知らねえ。

知らねえけど、なんか理由は一応あんだらう。

ここで言っちゃったら、全部が意味ねえんだよ。

やっぱり、俺の口から出てきた言葉は、

「知らねえ」

だった。

言った途端に、また顔は水の中。

ぶががががが。

またも意識が遠のきそうになる。

で、また見計らったように、水から出される。

ぶはあつ！

大きく息を吸う。女が俺の頭をさつきよりも高く持ち上げた弾みで、俺の目にあってはならないものが目に入ってきた。

女が何か言っていたが、無我夢中で、もう何も聞こえない。

完全な絶望感が俺の胸を蝕んでいった。

あってはならないもの。

それは、破壊された俺の携帯電話だった。

俺の視線の動きに、男が気がついたらしい。

「お前をかつさう時に、ぶっ壊しておいた。邪魔だからな」
なつ。

するってえと、電話が通じない以上の異常がないってことだ。
電池切れじゃ、援軍は来ない。

呼んだらすぐ来る正義の味方ってのは、本当には、いないもんなんだよな。
俺、泣いちゃうのかな。

本当に苦しい時は、どうでもいいことを考えたりするらしい。
だけど、同時に不思議な現象が起こっていたことも事実だった。

俺の頭の芯は、MMVの前で男に蹴られた時のように、すーっと冷えていった。

今まで、水の冷たさ、息の苦しさ、目の前の風景、いろんな刺激がごっちゃになっていたのに、一つ一つが分かれて鮮烈に俺の中に入ってくる。

気を失いそうになる瞬間までが、ありありと感じとれるようになっていた。

……で、本当に気を失っちゃったんだけどな。

情けないとか言うなよ。

6

俺は、顔をペチペチと叩かれて、目が覚めた。

なんだって？ 俺を解放する？

俺への拷問は、突如として終わった。

意味が全然わからない。今さら、人違いでした、ってことはないよな。

だったら、証拠隠滅に俺を殺すはずだ。

そういうやつらだってことは、体でしっかり覚えさせられた。

だから、人違いってことはない。

「立て」

俺は、そっと体を確かめた。骨が折れてるってことは、一応なさそうだった。

ちよつとはマシかな。何に比べてか、って問題だけど。

よろよろと立ち上がる。

暴れてえ。だけど、今この状況で暴れても、てんで勝てなさそうなことだけは、間違いなかった。

手枷、足枷を外されたのに、俺は言われるがまま。

だってよ、スーツ姿の男の手には、拳銃があったんだぜ。

モデルガンかもしれないけど、俺にや区別が全然つかねえし。

歯ざしりするぐらいしか、できることがないと来たもんだ。

「上半身だけ裸になれ」

なんでだよ。何する気だ？

わかんなくても、ま、おとなしく脱ぐしかねえ。

うおっ、すげえ、俺の体。

脱いでみて、びっくりした。

痣で所々が青黒くなっちまっている。

どおりで、痛いわけだ。

「両手を上げる」

おとなしく両手を頭上に挙げると、MMVの前で見た残りの二人の男たちが二人がかりで、俺の体に薄い四角い箱が九個ついたマジックテープを巻きつけやがった。

マジックテープの上に赤、青、黄、緑、黒のコードが付いている。

何だ、これ？

聞く前に、スーツ姿の男が教えてくれた。

「爆弾だ。八個付いている。残りの一つの箱は点火装置。こちらからの操作で、いつでも爆発できる。

心臓の上に置いておいてやるからな。ひっひ」

解放してくれるんじゃないのかよ。

「暴れられても困るからな。足枷つけさせてもらうぜ」

こんな土産、要らねえんだよ。

いつでも俺は、木端微塵じゃねえか。

膝がブルブル笑ったのは、蹴りまくられて全身ボロボロだったせいじゃない。

7

「あばよ」と言われて、俺はどこかの山の中に放り出された。

車の中で、「あんたたち、誰だ？」って聞いたたら、ゲラゲラ笑いながら『天上の光』って答えやがった。バカにしゃがって。

日本の通信衛星を壊して、犯行声明を出すような奴らが、わざわざ俺んところ来るかってえの。

「怖いところの名前なんぞ借りると、後ででかい代償払うことになるぜえ」って言ってやりたかった。けれど、さすがに爆弾しよわされちまっちゃ、言えねえ。

とにかく今は夜中だ。腕時計は表面のプラスチックに罅が入っていただけで、ムーブメントは無事のようだった。

周りは木ばっかり。視界ゼロ。真っ暗。

濡れた土の匂いが鼻につく。マイナスイオンで一杯だろうな。

どこだ、ここは？

俺はご丁寧に目隠しされて、ここまで運ばれたから、監禁場所がどこだったかも、皆目わからねえ。

わかったのは、地下室だった、ってことだけだった。

こりゃ、助けを求めに、人里に下りていけねえってことか。

降りて行ったところで、ボンってやられちゃあ、たまんねえ。

周りの人も巻き込んでしまう。

下手に動いて振動を与えて、ボン、もいただけない。咳をするのでさえ、おそろおそろで、やたら神経を消耗する。

携帯さえあればなあ。

鞆は返してもらえたけれど、こんなときに役に立つもんは、何一つ入っていない。

俺は、へたへたと地面に座り込んだ。

このまま、夜明かした。

山の中。動けない。ついでの爆弾をしょっている。一人つきり。夜。ちよつと寒い。

俺、どうなっちまうんだろう。

だけど、拷問の後半戦は終わっちゃいないって現実だけはわかった。

待つこと五時間。そろそろ空が白んでくる頃かもしれない。

俺は、ちらりとも寝ることなただけで、耐えていた。

体の前後ろに取りつけられた八つの爆弾は、今この瞬間に爆発するかもしれない、もしかしたら、次の瞬間に爆発するのかもしれない。

ロシアン・ルーレットを繰り返し、ずくつと続けているようなものだ。

どんなに逃げたくても、逃げられない。

肌寒いはずなのに、シャツは汗でぐっしよりだった。冷や汗も出るときや、すごいらしい。

腹が減ってるはずなのに、何にも感じねえ。

一瞬一瞬を経るごとに、神経がゴリゴリと擦り減っていく。

体を同じ姿勢で支えているのも限界だった。

ふらりふらりと体が揺れ始めたころ、上空からヘリのローター音が聞こえてきた。

音が大きい。

木の影で、ヘリについているランプは見えないが、近い。

ん？俺のことがわかってるのか？なんで？

不思議なことに、ローター音は俺を中心とした円上を移動していた。

あ、光だ。

ヘリから下に向けて強力なライトが光っている。

何かを探してるんだ。その対象は多分、俺。

よっしゃ！

俺は大声で叫んだ。

「ここだあつ！」

俺の声が聞こえたのか聞こえなかったのかは、わからなかった。それでも、俺の上をサーチライトが

通って行く。

おじさんの声がヘリからマイクを通して、聞こえてきた。

「少年、そこにいなさい。今すぐ助けに行く」

ヘリは遠ざかって行った。

ふう。

なんで、俺の場所がわかったのかは、依然わからないけれど。

とにかく一安心だ。

8

十五分ほどして、落ち葉を踏みしめる音が聞こえてきた。

人じゃないものだったら困るな。例えば、クマとか、イノシシとか。

怪我すんのも嫌だけど、一緒に爆発つてのも、ひっじように迷惑だ。

木の間から出てきた『もの』を見て、俺はぶったまげたね。

「よっ！」

懐中電灯を片手に奇妙奇天烈なポーズを取る美愛だった。

「よ……」

「いつ君、ポーズが足りないよ」

美愛は怒ったように腰に手を当てて、こっちに近づいてくる。

俺は今、そんなところじゃねえ。

体を動かそうとしたくないのに、なんでかプルプルと震え上がる。

「く、来るな」

「ん？ ふにゃあ、どうしたのお？」

美愛は懐中電灯で俺の顔を照らした。

眩しい。

「顔、怪我してるじゃない」

美愛は最後の数歩を、駆けよってこようとした。

限界だ。

「お、俺、ば、爆弾を、持ってる」

「え？ 嘘？」

美愛はぴたっと動きを止めた。

「本当だ。俺に巻きついている」

俺はズボンにしまい損ねたYシャツの裾を、べろりと捲って、爆弾の入ったケースを見せた。

美愛の持っていた懐中電灯が、ぼたっと落ちた。地面をころころと転がっていく。

そろそろ夜明けらしい。だんだんと周囲が明るくなってきて、俺にも美愛の顔がうっすらと見えるようになってきた。

美愛、泣いてるのか？

美愛は何にも言わなかった。

ただ、青褪めた顔で、静かに頬を濡らしていた。

美愛はごくりと唾を飲み込むと、とてもとても悲しそうな、寂しそうな顔をして、ポケットから四角いものを取り出した。

俺の聞いた覚えもないような硬い声で、

「被害者は爆弾を持たされている模様。援護を要請します」

とだけ言った。

「美愛？」

俺は美愛が何を言ってるのか、全然わからなかった。音が意味をなさずに、パラパラと頭の中を通り過ぎて行ったみたいだった。

被害者って、俺だよな。何だよ、その言い方。

「何してる？ 誰と話してるんだ？」

いつものほにやほにやしてる美愛は、どこへ行った？

「ごめん」

ごめんじゃ、わかんねえよ。何が、ごめんなんだよ。

まあ、いつだって、迷惑ばっかし掛けられてるようなもんだけどな。

念のため、言ってみる。沢山ごっそり迷惑を掛けられているうちの、何について謝っているのかを。

それがわからなきゃ、謝られる意味がねえ。

「何が？」

美愛は答えず、泣き笑いのような顔になって、俺の前に来た。

「ばっ！ 来んじゃねえ」

何のために、来るなって言ってると思ってるんだ。

巻き込みたくねえんだよお。

「ふにやらあ。平気だよお」

「俺には爆弾が！」

「いつ君、バカだなあ」

「ばっ！ バカって何だ！」

「だから、いって言ってるんだよお。さあ」

美愛は俺の手首を握って、「行こうよ」と誘う素振りを見せた。

「ダメだ」

美愛は良くても、俺が良くねえ。

第一、俺には何が何だか分かりやしねえ。

美愛がいつも何やってるのかも、今この瞬間に何を考えてるのかも。なんで、こんなに落ちついてやがるんだ、こいつ？

今だって平気で俺の半径三十センチメートル以内にいるし。

それに、どうやって俺を見つけたんだ？

「ダメって？」

「行くって、どこへ行くんだ？ お前、誰とつるんでるんだ？」

途端に美愛の顔から、笑みが消えた。

代わって、表情に浮かんできたのは、悲しいとしか表現できないような面持ちだった。

だから、何でそんな顔になる？

俺は苛々する。

爆弾だけでも十分過ぎるほど不安なのに、別の不安が俺を襲ってきた。

何なんだ、この不安感は。

いつも、色々はぐらかされているけれど、今のは何だか違う。

美愛の奴、どつか手の届かない所に行っちまいそうに見える。

「いいから。いつ君の爆弾を取ってもらえる場所に連れて行ってあげるから、来て」

俺たちが言い合いをしていると、ガサガサという音が聞こえてきた。

複数いるらしい。

「等々力一起君だね」

がたいのいい、ちよつと権力臭のするようなおっさんが現れた。短髪の頭に白いものがちらほらと混

じっている。

「我々は群馬県警だ」

警察と来たか。

おっさんは警察手帳のバッチを俺に見せてくれた。

思わず崩れそうになる俺の脇を、美愛と二人で支えてくれる。

「だから、連れて行ってあげると言ったのに」

美愛が不満そうに、ぼそりと呟いた。

美愛の奴、つるんではるのは警察だったのか。

だーれと仲良くしてるのかと思っちゃまったよ。

最悪の事態は避けられた。くわばら、くわばら。

「残念ながら、爆発物処理班は、ここにはいない。こんな事態を想定していなかった。他に何か、異常はあるか？」

「しこたま蹴られた。骨は折れてないけど、痣だらけだ」

上半身についた痣を見れば、下半身がどうなっているかなんて、簡単に想像がつく。

今日は一日中、ずーっと痛いだろうな。

「ひっ！ いっ君……」

美愛の奴、悪気なかったんだな。

俺は声にならない悲鳴を上げる美愛を見て、今さらながらに、そう思った。

口を割らなくて良かった。

自分から裏切るなんて、まっぴらだ。

俺たちは、そろりそろりとヘリコプターのある場所へ移動した。

俺は、思ったより辺鄙なところに放置されたんじゃないかなかったらしい。

道路に出て、十分ほど歩いたところにスーパの駐車場があつて、そこでヘリが待機していた。

道すがら、俺に仕掛けられた爆弾について話をすると、おっさんはどこか携帯電話で話をし、俺にヘリコプターに乗るよう指示した。

全員が乗ると、ヘリのドアがスライドして閉まった。

ヘリは東京に行くらしい。

俺、爆弾を持つてるんだけど。いいのかよ。

人ごみの中行っちゃったら、まじいような気がするんだけども。

「他人に知られたら、大事になる。他言無用だ」

って、誰にも言えませんが。携帯ぶっ壊れてるし。

ぶつくさ、考えられるようになったことは、だんだん普通に戻ってきたのかな？

ヘリに乗って逃げちまえば、遠隔操作でボン、ってことがなくなるってわけで。

にしても、まだ爆弾を体にぶら下げてるのに、結構、肝っ玉が据わってるな、俺。

ヘリに乗ってる間中、美愛は泣き通しだった。

俺のために泣いてくれるのは非常に嬉しいんだけど、事情を説明してくんねえかな？

9

二〇一X年五月一七日午前十時@東京の警察病院

俺が連れて行かれたのは、意外なことに、警察病院のレントゲン室だった。

確かに怪我してるけど、爆弾が先だろ？

どういうトラップが仕掛けられているかわからないから、配線を調べるんだそうなるほど。

もうちょつと、爆弾とお付き合いしなきゃならぬらしい。

腰に鉛の遮蔽板を巻きつけると、X線撮影に臨んだ。

俺の周りをぐるりと訳のわからん乳白色の機械が一周すると、撮影完了だった。

俺は上半身、爆弾チョッキを着たまま、長椅子だけある殺風景な部屋で待ち続け、小一時間ばかり経過した。隣に美愛がうつむいて座っていた。

反省してるのかな？ 何を考えているのか、よくわからない。

「なあ」

話の続きがしたくて、美愛に呼びかけても、「ん」としか返さない。顔も上げやしねえ。

参ったね。どう接していいのやら。もう、完全にお手上げ。

普段は美愛から積極的に喋りかけてくるから、女の子が黙っちゃうとこんなに困るもんだとは、ついで思ってたがなかったぜ。

美愛は俺の家族じゃないのに、爆弾付きの俺の隣にいられる時点で、一般人じゃないことだけは、はっきりわかる。

俺には、それ以上の情報は掴めていない。

なんなんだよな。

にしても、爆弾の解体、まだかなあ。

そんなに複雑なのか？

にしても、この部屋は、何のためにあるだろう？

だんだん、どうでもいいようなことに思考が泳いで行くようになったところ、ガチャリと音がしてドアが開き、白衣を着た技師のようなおねえさんがニッパ―片手にやってきた。

赤い縁の眼鏡に、茶色のポニーテールがふわふわと揺れている。白衣からストッキングの脚が見えているってことは、下にスカートを穿いているらしい。

この人が解体してくれるのか？

おねえさんに脱がされちゃうかも(はーと)なんて、ちらちら美愛を気にしながら考えていると、

「方針が決まったわ」

とだけ、おねえさんは言うや否や、パチパチパチと無造作に色とりどりのコードを切っていった。

はあっ？ 普通、どの色を切るか、順番が決まっていて、慎重に、なおかつ、緊張に手をプルプルさせながら、じつくり切っていくもんじゃないのか？

「なっ！ 何してくれるんだ！ もっと、大事にっ！」

おねえさんは手を止める様子が全然ない。

俺には、何だかわからない。

このねえさん、気でもトチ狂ってるのか？

「ちよつと美愛、何とか言っちゃってくれ」

美愛も泣き腫らした目と口を、ぱっくりと開けているだけだった。

もう大丈夫って何だよ。

美愛は、とてもとても寂しそうな顔を見ると、

「わたしはねえ、いつ君に本当は、会っちゃいけない人だったんだよお」

「はっ？」

何だよ、いきなり。

「いつ君の大大大大嫌いな人なんだよお」

はあ、そうなんですか。勝手に決めつけられてもな。

美愛は俺に両掌を見せると、

「もうね、血でまみれちゃってるんだよお、この手」

と、笑った時の顔の輪郭を無理矢理なぞったような、端々に痛々しさの残る笑みを俺に向けた。

何、この顔。こんな顔見たいんじゃないじゃねえ。

手が血でまみれてる？ 何で？

普通、人殺したときに使うよな。こういう表現って。

……マジかよ。

嘘じゃねえのはわかる。嘘ならこんな顔する必要ねえし。

多分、マジだ。だけど、唐突過ぎて事情もわからねえ。

だけど、ストレートに聞くのも、ちよつと……なあ。

「あ？ 何かあったのか？」

結局、俺は大福の餅のように、核心をやんわりと包みこんで聞くしかできなかった。

直接「殺したのか？」なんて聞けねえ。

「うん、ちよつとねえ。いつ君のパパみたいになっちゃったんだよお。だから、本当はいつ君は、わたしを嫌いなんだよお。いつ君はまだ綺麗だから、こんな子に関わっちゃ絶対いけないんだよお」

「親父と同じ？」

「パパとママの後を継いだんだあ」

じゃ、そういうことをしているのか。

美愛の両親と俺の親父は、一時期だけど、同じ組織で働いていた。日本政府、内閣直属の諜報機関だ。美愛の両親は美愛が八つの時に亡くなっちゃまって、組織のおじさんと言われる人に育てられていた。

「そう、いつ君はそういう人、嫌いでしょお？ それに、こんな目に遭っちゃうし」

いや、突然、そんなこと言われても……んで、どうしろってんだよ。

「何で継いだんだ？」

「ん？ 血筋かなあ。後継ぐってことで、養育費が国から出てるんだあ」

はああ。そういうことか。仕事で学校に来られなかったのか。疲れて、いつも寝てたんだな。

そうか、そうか。やっとわかった。

俺の中の謎のピースとピースが、ちよつとだけ光って繋がった。

「中学のときねえ、訓練するって外国に連れて行かれたんだあ。だから、三年間、いなかったの。行く前に、いつ君にだけ言ったけど、帰って来たら、いつ君すっかり忘れてた。挨拶もみんな、すっかり」
言われてみりゃ、そんなことあったような、なかったような……。あの奇天烈な挨拶って、何か意味あったっけ？

「だから、嫌いなんでしょ？」

美愛は言葉を重ねる。

「いや、そんなことは……」

迷惑は目一杯、山のように大量に掛けられているけど、断じて俺は美愛を嫌いだなんて思ったことはない。

何で忘れちゃったのか、全然わからないけれど。

美愛の奴、何か勘違いしてるような気がする。

「俺……」

俺は、俺にとつて、とても重要なことを言おうとしたんだが、

「時間だから行くねえ。いつ君は、これから事情聴取とかあるけど、普通にしてればいいからねえ」と、美愛に遮られちゃった。

「う………わかった」

言えなかった。

今すぐ、無理に押し付けるように、言うことでもないし。

だけど、どうしても聞きたいことがあった。

「どうやって俺の場所がわかった？」

「ふにやらあ。いつ君、黙って人の所有物を持って行っちゃ、だめでしょお」

あ？ 俺、何かしたか？

「黒猫、発信器だったんだよお。ポケットに入ってるでしょお」

「あ、ばれたっけ！」

そうだ、そうだ。俺、今朝、ノート返してもらおうついでに、黒猫のちっこい人形、さらっておいたんだった。

すっかり忘れてたぜ。一日も経ってないのに、すんげー遠い記憶だ。

「持って行ってくれて良かったよお。あれなきや、見つからなかったと思うよお。本当はねえ、もつと早くに行きたかったんだけどねえ。いつ君のいた場所、地下か何かで、何にもわからなかったんだよお」

確かに、地下だった。

地上だったら、もつと早く来てくれたのかもしれない。

そう思ったけど、ま、しかたねえもんは、しかたねえ。

「じゃあねえ。いつ君が入れてくれたストラップ、貰っちゃうからねえ」

あっ！ あれはっ！ 発売日に店先で行列してまで買ったやつだったのにっ！

しばらく経ったら、絶対プレミアだって付くんだぞっ！ ……そのはずだ。

美愛はドアに向かって歩いて行っちまう。

だめだ、こりゃ。返してもらえねえ。

小さく手を振って、美愛は出て行った。

俺はこの後、チャンスってもんは二度も三度もないってことを、痛いほど知るんだ。

俺って、本当にバカだ。

俺の頭なんか、かち割れちまえばいいのに。

二〇一X年五月一八日午前十一時@美愛の家前

「嘘だろっ！」

俺は病院のベッドで休息を取った後、一通りの事情聴取を受けると、いったん解放された。美愛の携帯に何回か電話したけれど、出ない。

まあ、よくあるんだが、あんな会話の後だ。

気になって、美愛のマンションに行ってみたんだ。

そしたら、表札にあった初沢の二文字は、綺麗さっぱり消えてしまっていた。

「じゃあね」とは言ったが、本当に全部なくなっちゃうのかよ。

ドアの取っ手に手を掛けて、がちやりと回すと、カギが開いていた。

いいのかよ？

戸惑いながらも、おそろおそろドアを開ける。

目に入ったのは、家具の全くない空っぽの部屋だった。

……行っちゃまった。

……また、置いていかれた。

頭がぐるぐるする。

吐き気がして、気が遠くなりそうになった。

最低だ。

……あれ？　　そういえば、こんな気持ち、どこかで味わったことがあるような……。

その時、すっかり忘れちゃった光景が、俺の頭の中で光ったんだ。

あああ。　　いろんな記憶が、洪水のように頭の中に戻ってくる。

橋の下。

よくある秘密基地で、だけど、俺たちには、とても大事な秘密基地。

段ボールで区切ってあって、扉とか柵とかあって、それなりにしっかりしていた。

何か嬉しいことがあったり、困ったことがあると、そこで美愛と話した。

男と女が二人つきりだと、友達にからかわれたりする。だけど、秘密基地でなら、他人目も気にせず、

存分に話すことができた。

なんで、ガキって冷やかすんだろうな？ 大人になったら、男と女が話すなんて、当たり前のことなのにさ。

美愛は中学に上がるときに、少しの間いなくなると、そこで俺に伝えてくれたんだ。

そうだ。教えてくれていた。

本当は秘密のはずの、自分の所属まで言って。

だけど、親父と同じでいなくなるんだと思ったら、目の前が真っ暗になって、今みたいな、ぐるぐるした気分になった。

ショックが俺を支配した。人がいなくなる。それだけで、あの時の俺には十分だった。俺の理性が勝つことはなかったんだ。

んで、忘れちゃったんだ。裏切られたと思って。

でも、結局、美愛は俺の前に再び姿を現した。行かなくていいような学校に入学してまで。

美愛は、嘘を言っていなかった。

あの、カマキリのような奇天烈な挨拶。

親父が戦争したいがために、俺と母さんを捨てて行ったところ、俺は本当に意気消沈していた。

なんで親父は、俺たちを捨てて行かなきゃいけないのか。親父にとって俺は、捨てられる程度のものだったのか。

子供の俺の力じゃ、何もできない。取り戻せない。

無力感で体が骨抜きベーコンにでもなったみたいだった。

怒りも痛みも悲しみもごっちゃになって、心が飽和しちまってた。

そんなところに、美愛が突然、やり始めた。

「味方同士の符丁だ」って言って。

大事な大事な挨拶だったんだ。俺を慰めるための。

だから、美愛の奴、俺が忘れちゃまっけていても、あんなにしつこく俺にやらせてたんだ。

何もわからない周囲の奴らに笑われても、当たり前のように自分もやって。

ときには、おどけてまでして。

俺はバカだ。

なんてことをしてたんだ。

何も知らないで。

知らない現状に不満を持ちつつも、しっかりと謎に踏み込まないで。甘んじて。

でも、美愛は、どっか行っちゃった。

俺が中途半端だったんだ。

また見失っちゃまう。

美愛は自分の手が血にまみれてるって、泣いてた。俺の前にいちゃいけないって。まるで美愛自身が穢れてしまっているかのよう。

正直、俺は美愛が戦争をやっているという事実は、驚きだった。

だけど、美愛は美愛だ。

俺の中では、しっかりと小学生のころの美愛と今の美愛は、繋がっている。

記憶も取り戻したしな。

美愛は何をしても、穢れてなんかいない。

何バカなこと言っちゃがんだ。

よだれを垂らす程に楽しみにしていた、高級フルーツが山のように載ってる鳴門屋のパフェも食わねえで。

勝手にわかった振りして消えやがって。……ムカつく。

俺は決めた。もう頭の中のぐるぐるも吐き気も治まっていた。

今度は、俺が行く番だ。

手遅れ、それが一番最悪なんだ。

待っていやがれ、コン畜生。

2

俺は、その足で銀行のATMに行くと、軍資金を用意した。

家に帰って、クソ親父の物を漁る。

親父が出て行ったとき、俺んちは名字が変わった。母さんが父さんの置いていった離婚届を出したからだった。

引っ越しもした。クソ親父のものは段ボールに入れられて、納戸の一番奥に入れられていたのだが、引っ張り出すのも面倒くせえ。

えんやこらと目的の段ボールを引っ張り出して、中身を引っくり返したが、思ったもんがねえ。俺と親父を結び付ける代物がねえんだよ。

何だ、こりゃ？ 俺のへその緒かよ。

こりゃ、かあさんとの繋がりだ。

違うってえの。何でここに入ってるんだ？ 自分で自分に突っ込み入れちまうぜ。

どんなに段ボールを引っ掻き回しても、なーにも出てこない。

物証に全然ならねえんだよ。どれもこれも。

んで、俺は考えたね。

で、閃いた。

つまりは、お角違いだっただってことだ。

こんなもん漁ってないで、とつと市役所に行けつうの。

ま、必要なもんは、俺の戸籍謄本だったんだな。

確か俺の名前の横に、親父とかあさんの名前が載ってたはずだ。

今となっちゃ、使えるもんは何でも使うぜ。

で、速攻ゲットすると、特急に乗って、行くべきところに行ったわけだ。

3

二〇一X年五月一八日午後一時@霞が関

「あの、すみません……」

俺は、霞が関の官庁街の一角、古ぼけた三階建てのコンクリート造りの建物の、入口にいた。安普請
そうな建物だった。耐震関係どうなってるのかな？

当然のことながら、看板も表札もない。看板なんかあったら、表向き存在しない組織があることにな
っちゃうからな。

明日には事情聴取の続きが待っている。それまでには戻ってないとならない。だが、そんなことは気
にしない。

どうせ、必要なくなるしな。てか、俺的には、その予定。

ガラス張りのドアを開けて中に入ると、四十後半ぐらいに見えるおばちゃんが受付の机の後ろで、ピ
ンクの制服を着て座っていた。

どこもかしこも、お仕着せつてのはあるもんだ。

おばさんは胡散臭そうに俺に視線を走らせると、見るなり、手で出て行けというそぶりをした。

一言もなしかよっ！

ま、普通、諜報機関の入ったビルの受付に高校生が行ったところで、相手してもらえないわけがない。
相手してもらえねえんだよ！

いいとこ門前払いか、悪けりや、受付のおばちゃんに呼ばれた警察官に説教されるのがオチだ。

だけど、俺には勝算があったね。

俺の手には、トマホーク並みの破壊力のある手札があったのさ。

俺は忌まわしき、ついでに、周囲の大人全員に禁じられていた手札を切った。

俺は、おばちゃんに向かって、できる限り純粹そうに見える愛想笑いを浮かべると、

「ボク、そちらでちよっとの間お世話になった、勝元剛志たけしの息子なんですケド……。僕の父のことで、

ちよつと……」

どっかーん。

俺の言葉は、全部を言い終わる前に、見事に炸裂した。

おばちゃんは目を引ん剥くと、机の下に手をやる。

何かのボタンを押したんだろうな。

俺は銀行強盗か、つつうの。

さすがに親父は、内閣情報調査部第二分室でも、お尋ね者だったらしい。

十秒もしないうちに、凸凹コンビのおじさんが二人、俺のところに来てきた。

「ちよつと君、来たまえ」

ほくらね、建物侵入、大成功。掛かった時間は、たったの三分弱。

楽勝だったな。

4

俺が連れて行かれたのは、三階の一室。

扉のある壁を含む四面の全部にスチールの本棚が置かれており、バインダーやら本やらが、ぎっしり詰まっている。

偉そうな革張りの椅子と、その前に置かれた大きな木の机が、そこに座るべき人物の偉さを物語っていた。

机の上には薄型のモニターが三面と紙束どっちゃり。いかにも情報収集、分析してますっていう部屋だった。

いきなり、本丸かよ。

俺の入ってきたドアが開くと、五十過ぎのおじさんが入ってきて、河本と名乗った。

百八十はあるんじゃないか？ 胸板の厚さからいっても、隙のない筋肉の鎧が灰色の背広の下で潜んでいるように見える。

昔は、ずいぶんと尖ってたんだろうな。表向きは柔らかかそうな印象を与えているけど、今でも芯は固そうだった。

「勝元一起君、いや失礼、今は等々力だったね。今回のことは大変だった。同情するよ」

ええ、大変でしたとも。ただのおちよくりにしては、ひどかった。

なんて暢気に思い返している場合じゃねえ！

「げっ！」

何で、俺が誰かわかんだよ。この建物に入ってから、俺は息子だって証拠はおろか、俺の名前すら出してねえのに。

出鼻をぺっしゅんこに挫かれた気分だ。全っ然、甘くねえ。

「君のことは、すでに調査済みだ。ただ、接触する機会がなかっただけだよ」

俺、顔パスか？ てことは、なんだ？ 俺もお尋ね者ってことかよっ！

何、定期的に俺のことを調べている？ んなこと、一度も気がつかなかったぜ。くわばら、くわばら。

「お父さんのことは、よく覚えているよ。ここでも屈指の優秀な人材だった。とても冷静だね。まさか、失踪するとは思わなかったよ」

冷静？ あの戦争キチガイが？

「で、お父さんのこと、何かわかったのかね？」

「いやあ、それは」

「僕たちもねえ、お父さんをインド洋のパキスタン沖までは追跡できたんだけどねえ。洋上で忽然と姿を見失ってしまったんだよ。豪華客船《あすか号》を、知ってるかい？ 船中を探しても、いなくてねえ。まあ、大きな船だから、探すにも『こと』だった」

親父、そんな真似してやがったんか。

「半日、いない事実気がつかなかった僕らのミスなだけどねえ。本当にすまない」

「いえいえ」

悪いのは、親父だ。そうに決まってる。

なぜ、親父は追跡を受けて？

「組織を抜けた人は一定期間、動向を探られるのは、当たり前だろう。特殊技能と情報を持って、変なところに駆けこまれちゃ、困るからな」

あゝ、なるほど。

「母に報告したら、喜ぶかもしれませんが」

「ここに来たことが、お母さんにばれてもいいのかい？」

あ……。そいつあ、まずい。

かあさんは、親父のようになっちまうことを心配している。それも、ヒステリックな程に。ってか、そんな家庭事情まで知ってるのかっ！

底が知れない。俺の知らない事実が多すぎる。

思わず無言になる俺に、河本というおっさんは言葉を重ねる。

「で、用件は何だい？」

親父の情報なんて俺のところには、端からない真実まで見抜かれていた。

「俺も、混ぜてもらえないかなあつと」

ぽりぽりと鼻の横を搔く。嘘を言っても、しょうがない。

「なぜ？」

「俺が解放される前、俺を痛めつけた奴らが《天上の光》だって名乗ったんです。仕返しするなら、ここかなあつと思つて」

なんちゆう、猩々緋みたいに真っ赤なウソ。半分は本当だけど、もう半分は別だ。

「ふん。ま、嘘なら、嘘発見器で、すぐぐにわかるけどね」

河本っておつさん、ずいぶんな狸と見た。

「ここはインテリジェンス諜報活動をするところだ、ってことは知ってるね？」

そりやもう。内閣情報調査部って、そもそもそういうところだろ？

「通常、諜報活動の九割は友好的な方法で行われる。例えば、新聞、雑誌、声明、発言者が誰かとかの、向こうさんの出す情報を詳細に分析する。それで、相手の意図を知ろうとする。それが、本室の役目だ。

我々、存在しないはずの分室では、残りの一割を担うわけだよ」

「残りの一割って？」

「まあ、一般的には、超法規的と言われる方法だな」

「犯罪者になるってことですか？」

「法律に触れなければ、犯罪者じゃないさ。倫理とか道徳とかのレベルでの話ではなくてね。法律に触れない人というのも、然り。例えば、警察官が拳銃を持てるのも、限定的に法律に触れない人、という括りだからだね」

そりやそうだ。

でも、何て答えたらいいんだ。

これじゃ、俺はただの赤ん坊だ。何にも知らない。知らないから、毎日のほほくと暮らしている。

俺は、ここでも、ころりと転がされちまうのか。

俺が黙っていると、

「どうも君は、何も知らないらしいな。ふーむ。頭の中に入っているソフトウェアは、使えたもんじゃない。ぬくぬくと温室で育ってきたようだ」

ぐっ！ ぬくぬくかよっ！

とにかく、ここでチャンス逃したら、終わりだ。

バカはバカなりに頑張らにやならねえということもある、つつうのによ。

「お父さんのこともわかってない。だから、のこのこやって来られる」

いや、でも、何か使えるでしょうよ。

「素人は使えないんだよねえ。マネキン持って行くほうが、まだマシだよ。やつらは勝手に動かないからねえ」

俺は、木偶の坊以下ですか。

そういうもんか。

なんて、感心している場合じゃない。

「でも、衛星、関係あるんですよね？」

「まあね。うちの国のが落とされちゃって、迷惑してるんだよね」

「俺、衛星、制御できます」

「それなら、うちの美愛ができるよ」

「いや、でも、ほら、手数は、多い方がいいんじゃないっすか？ 沢山、上がっているらしいし」
俺の体が冷や汗で、じんわりと滲んでくる。

「父の血継いでると、参加資格あるんじゃないっすか？」

わかってやってることだが、親父おやじを使おうとすると、何だか違和感がある。
気分が悪い。

やっぱり、納得いかない人間と血縁なんて、考えたくもねえんだよ。

清濁合わせてるのは、こういうことを言うんだな。複雑だ。

「まあ、うちはスカウト制だから、血縁者は有力ターゲットだけだね」

「じゃあっ！」

違和感をぐいっと飲み込んで、俺は声を大きくした。

「でも、君、あんまり優秀じゃないんだよねえ……。まあ、机の上のお勉強だけが全てじゃないけど、それぐらい、ある程度は、できてくれないとねえ」

おっさんは、そこで思わせぶりに言葉を切った。

ぐげげっ。きっぱり、はっきりと言いやがった。

真面目にやってるようで、のらりくらりとやってないのが、響いていやがる。

「本当はヤレば、デキル子なんです」って自分で言ってみるかな。

「でもねえ、君、すんごく、クリティカルなことしちやってるんだよねえ」

おっさんは、あきれたような口ぶりで、ずいっと俺に顔を近づけた。

な、なんなんだよ。なんか俺、やばいことしたか？

「はっ」

「まっずいんだよ。とっつてもね」

今度はおっさんは、まだわからないのかとでも言わんばかりに顔を歪め、体を離した。

口先では「まっずい」と言う割には、のんびりした口調で、真意がどこにあるのかわからない。

だから、なんなんだよ？ 心当たりが、なーもない。

「顔が割れたスパイなんて使えないんだよねえ」

ぐがががん！ そういやあ、俺の顔は、高校生の衛星開発者として全国的に新聞、テレビで流れちまってるんだった！ 俺をいろんなことが襲うもんだから、すっかり忘れてたぜっ！

最悪だっ！ 最低だっ！ 終わっちまったっ！

言われりや、さすがの俺にだって、それくらいはわかる。

あああつ！ てことはだ。美愛の奴が、本当は自分が設計したのに、俺に身代わりを頼んだ理由は、

そういう裏事情があったからかっ！

公に自分の名前を出すわけにはいかなかったのか。やっとなかったぜ。

お蔭さんで俺は、ニュースに顔出しで出るやら、全校生徒の前で表彰されちゃったりやら、再来週の

全校生徒の前での発表やら、誘拐監禁拷問やらを食らったわけだ。

笑えねえ。全然、笑えねえ。

……とほほ。全部、水に流すしかないのかよ……。

俺は心の中で、泣きの涙にくれていた。

けどな、おいおいおいおい。ったく、そりゃ、美愛の名前出し、顔出しはまずいだろうけどさ……。今、それがアダになっちまってるんだけどよ。

どうしてくれる？

「君、何にも考えてないんだね……」なんて、おっさんに呟かれちまってるし。

俺、ホントに、どうしよ。

もう、打つ手は全然ないのか。

起死回生の一手というやつを、俺は所望するね。……って誰がくれんだよっ！

「ふん。ま、でも、とりあえず、こっちに置いておくのは、いいことかもしれないな」

なんて、小さい声で、ぼそぼそ呟いている。

俺は何の物質ものじちかよ。

やつべ、わかんねえことが増えた。それも自分の扱いについて。

ラッキーかもしれないけど、同時に、まじいんじゃねえの？

「じゃ、今回だけは、ちよつと来てもらうことにするよ。ただし、妙なマネをしたら、二度と日本の地を踏めないようにするからね」

よっしゃっ！ なんとか滑り込んだぞ。

とりあえず、良しとすることにする。

しかし、妙なマネなんてする気はさらさらないが、なんかやらかした日には、本当に日本から追い出されちまいそうだな。

ホント、捨て身だな、俺。

甘くねえよ。

5

「はい、室長」

河本のおっさんが、俺に第二分室の説明をしていると、卓上の電話が鳴った。

赤電話のホットラインがあるのかと思ったら、使い古された古い普通の電話機だった。

……のわりに、着信音がトロイメライだったけど。

なんで？

「ほお、早かったねえ。早すぎてちよつと穿ちたい気もするけど、確かな？」

何か報告を受けていたらしい。

何かわかったんかな？

にしても、河本というおっさんはほとんど喜怒哀楽を表に出さない。俺が突然現れたつてのに、慌てふためいた表情の欠片もしてなかったし。

俺が玄関口に表れて一分と経つてなかったつてのに。ちつとは驚けよ。

今だって、火の付いていないたばこを口にくわえてヒョコヒョコさせながら、何考えてるかかわからない目をして電話の応対をしている。とにかく目が細い。

政治家やつてると相手に目の表情を読まれないために、目が細くなるつて聞いたことあるけど、多分同じことなんだろうな。

必要技術に違いない。

真似してむにーつと目を細めていたら、電話中の河本のおっさんがこつちを向いちまった。

「何をしている」と言わんばかりに、視線が俺で止まる。

やっべ。気まずい。

知らんぷりするしかねえな。

河本のおっさんが電話を切った。

何か言われるかな、と思つたら、「アメリカ行くよ」だつて。

へえ、そうなんだ。アメリカね。

……はっ？ アメリカ？

あんまりにも河本のおっさんが何でもないことのように言うから、俺まで普通にそうかあなんて思つちまったじゃねえか。

「明日、月に行つてください」つて言われても、河本のおっさんなら普通に「ああ、そう」つて言いながら月まで昇つて行つちまいそうだな。

なんでも、ロケットを打ち上げて宇宙産業やろうつてのは、国営事業だけじゃないんだと。

民間の会社でもロケット打ち上げてるんだとき。豪気な会社もあるもんだ。アメリカに三社、ロシアに二社ある。

要は打ち上げの信頼性があればいいんだと。要するに必ず成功してくれりゃいい。そりやそうだよな、ウン百億する衛星がおじゃんになつたら堪らん。

6

二〇一八年五月一八日午後七時@成田空港ロビー

「あー。あの人デスク」

俺は成田空港第一ターミナルにいる。

当然、見送りなんかじゃねえよ。河本のおっさんと、しっかり渡米することになっちまってるわけで。俺、飛行機なんか初めてだよ。

「アメリカ、行くよ」なんて、とてつもなく適当な言葉を聞かされてから、三時間も経たないうちに、あれよあれよという間に、俺のパスポートが出来上がってきた。

「公務で出かける人は黒パスポートじゃないんすか？」って、俺は、どっかで聞いたようなことを聞いてみた。

河本のおっさんは、半ば呆れ顔で、

「ないはずの組織に属している人間に、そんなもんくれるわけないだろう」
だつてさ。

へ？ てことは、道中うっかり死んでも（それが任務中であつても）、旅行中の不慮の事故になっちまう、つてことか？

……当たり前っちゃ、当たり前か。表向きの保証が全然ないわけね。……とほほ。
着替えは向こうで買えつてさ。なんと、行き当たりばったりな。……経費で落ちるんだらうな？

自慢じゃないが、俺は金がない。バイトもしてない高校生の懐なんて、笑っちゃうぐらい軽いんだよ。で、空港にいるわけだが。

もう一人、女が来るって言ってたんだ。

ベテランだつて言うから、おばさんかと思つたら、やっぱり、おばさんが椅子の上に座っていた。

白いチュールリップ・ハットに大きなサングラス。栗色のウェーブが掛かった髪の毛が、肩まで伸びている。水色のカーディガンと地味なロングスカートを着た小柄の女だった。

手は、白い手袋で覆われていた。口の周りに深くついた皺が、歳を物語っている。でもよ、逆に怪しくねえか、その格好。

四十は軽く超えてそうだな。ちよつと残念。もうちよつと若くないと、こつちも楽しくねえよ。あーあ。この旅行、何が楽しいんだ？

俺は、そつちのほうの期待をベキゲキヤムシャと折り畳んで、心の隅に押しやるしかなかった。うまくやつてかないと、まずいしな。

「初めまして、ボク……」

俺は挨拶しようと思つて、おばさんに近づいた途端、

「ごほっ、ごほっ！」

と、咽せ返っちゃまった。すっげー香水の匂いが、鼻から脳髓を撃ちぬく。

つけすぎなんだよ。香水なんてつけすぎたら、どんないい匂いでも、臭くしか感じられねえつての。

俺の敏感な鼻には厳しすぎる。

そもそも、この人、ホントにベテランのスパイなのかよ？ 匂いだけで、「あたしは、ここよ」って宣言

言してるようなもんじゃんよ。

息を吸いたきや、強烈な匂いをもう一度、嗅がなきゃならねえ。ムカつくが、相手は女だ。失礼にな

らないように、顔色を変えずに息を吸った。

あれれ？ この匂い……。おっかしいぞ。

てな訳で、俺は、やることを変える羽目になっちゃった。

「よっ！」

俺は薬指と小指を曲げ、手を前にカマキリのように突き出すポーズをやった。猫背になって片足を上げて。

目の前のおばちゃんの周囲に座っている他の客たちの「プッ」と小さく吹き出す音が聞こえてきた。

俺、痛い奴だ。河本のおっさんまでもが、とぼけた声で「何をしている？」と突っ込みを入れてきやがった。

でも、俺は断固やめない。

笑われたって、じえんじえん平気だもんな。

だってよ、俺の鼻はいいんだ。香水の匂いと体臭を嗅ぎわけることができるんだぜ。

体臭のほうは、俺の嗅ぎ慣れた匂い、つまり、美愛の匂いだったんだ。いきなり、ビンゴとはね。

匂いは、嘘つかねえ。なーにが四十代のおばさんだつての。変装なんてよ。

十五秒が経ち、三十秒が経った。その間、俺はずっとカマキリ・ポーズのまま。

俺が片足立ちでバランスを崩し始めたところに、やっと、目の前の美愛疑惑のあるオバサンが動いた。

小首を傾げ、クスツと笑うと、ちよつとだけ美愛よりもハスキーな声で

「面白い子ね、坊や」

だつてさ。チクショー！ 嘘つきだっ！ 声まで変わってやがるっ！

匂いは美愛だつて言つてんだよっ！ 中身も美愛なはずなんだっ！

最近よく映画とかで流行の特殊メイクやつてるんだろ？ 俺でも簡単に予想がつく。

うまいこと返してやりたい。だが、咄嗟の反応が出てこない。河本のおっさんはポンポンと氷のよう

に硬直する俺の肩を叩いて、

「気は済んだかい？」

と、生ぬるい表情を俺にくれてきやがった。

畜生。しかも、顔の表情とは裏腹に、目は「次やったら、許さんぞ」って言ってくるしよお。あーも

ー！

内心がっかりして、航空会社のカウンターでチケットを交換する。

あ。大事なことに気がついた。

森本って人のパスポート、偽造じゃん。

そういう世界なのね……。はああ。

*

「臭い……」

これ、どういう拷問？ 森本って人は、味方じゃねえのかよ。

飛行機なんて密閉空間じゃねえかよ。そんなに匂い撒き散らして、どうすんのさ。

俺は、この香水プンプンの人の隣で飛行時間の全部、つまり十時間も座っていることになっちまった。

折角の初めての飛行機なのに、ウキウキする気分なんて、どっか吹っ飛んじまったよ。

だんだん頭が痛くなってきた。鼻はすでに麻痺。よく乗機拒否されなかったもんだ。

……確か、すごい体臭で拒否された人いたはずだよな。カナダ航空だったっけ？

席は当然のことながら、エコノミー。

決して、居心地のいいもんじゃない。こんなところに詰め込まれてりや、なんとか症候群にもなるっ
てもんだ。

この強烈な匂いを河本のおっさんは、どうやりすごしてるんだろう？

左隣を見ると、しつかり、こっそり、鼻栓をして寝ていやがった。どこまでも抜け目のないおっさん
だ。

隣り合った飛行機の中でも、美愛なはずの人は俺の付け入る隙を見せず、アメリカ、ロサンゼルス空
港に着いちまった。

森本佳代子って名前なんだってさ。嘘くさくて、まともに呼べやしない。あの、とか、その、とかで
しか話しかけれねえ。気分わりいぜ。

結局、森本って人がまともに喋ってきたのは、

「なんで来たのかしら？ 何するか、わかってるの？ 遠足じゃないのよ。訓練された犬のほうが百万
倍も役に立つわ。今からでも遅くないから、帰ったら？」

という嫌味だけだった。たったの、そんだけ。

マジで、ムカつく。

あんたのやること見てからじゃないと、帰れねえんだよ！

化けの皮を引ん剥いてやりてえ。

……にしても、凄い臭いの中でも生きていけるもんなんだな、人間てえのは。

7

二〇一八年五月十九日午前十時@USA

民間宇宙会社《スペース・アトラス社》にほど近い、ホーソーン市の《ホテル富士》に俺たちはチェ
ックインした。

すんげーネーミングだ。おりゃ、びっくりしたね。ま、世界で十位に入るぐらいの高層のホテルなん
だとき。んで、富士。

潰れてなかったんだな、日本のホテルなのに。

香港系のほうが風水を大事にしているから、日本よりも遙かに順風満帆だって噂だ。人のデスマスクを天井に敷きつめてたりするんだぜ、やつらは。やることの次元が違う。

やっぱ、そういう力ってあるんかな？

部屋に入ると、ほどなくして中肉中背の三十代ぐらいのおっさんが部屋にやってきた。角刈りで顔の彫りが深い。

黒く日に焼けていて、顔つきがどこことなくアメリカナイズされている。アメリカで暮らしてます、って感じがプンプンする。

内閣情報調査室の分室の魚石と名乗った。苔むしてて、アユかなんかに突っつき回されてそうな名前だ。

名前と裏腹に、魚石さんはテキパキと報告を始めた。

結論から言うと《スペース・アトラス社》が、怪しいらしい。

犯行声明が出された時点で、どの発射台から上がったのが即、調査された。

表向きは全ての衛星の打ち上げ時には平和利用の誓約書が出されている。テロなんて起こらないのが表向きの見解だ。たとえ、紳士協定にしかならないとしても、だ。

ロケット打ち上げをする企業の全てを調べたけれど、そんな小さい衛星の相乗りなんて全然なかったらしい。

衛星の持ち主にしても、大学の研究室とか、中小企業とか、アマチュア無線の愛好者だとかで、持っけても一つか二つ。そもそも、これらの衛星たちは軌道を自分で変えることすらできないんだ。だから、シロ。

でも、現実に《ささやき》は潰されている。

ないはずのものが壊されるなんて、絶対に起こらない。

存在を故意に隠されてることなんだ。余計に犯罪の匂いがしてくるね。

んで、必死の追跡が始まったんだ。手に入れた資料の、たった一つの、どんな小さな数字の狂いも逃さない。そんな戦いだ。

ロケットがちゃんと目的の軌道に到達するためには、ロケット自身と衛星を含めた正確な重量がわかってないとならない。ここをごまかして、何かを紛れ込ませると、燃料が足りなくて高度が足りず、打ち上げ失敗になる。

かといって、燃料自体も重さがあるから、余裕を見て、必要以上に積むと、それだけ無駄が出る。金も余分に掛かる。だから、必要最小限ギリギリぐらいで運用するのが当たり前だ。

だけど《スペース・アトラス社》の十数回の打ち上げでは、この余裕を見た燃料が少し多めに使われていたらしいことが、記録からわかった。

余裕を多めに見た分が、何に使われたか。

もう、明らかだ。ロケットに積み込まれた非公式の重り、つまり、モグリの衛星が紛れ込んでいて、

その打ち上げに使われた、ってことさ。

相場一キログラムを余分に上げるのに必要な金は、約百万円。立派な横領ともいうな。こうして、記録に残らない衛星がまんまと宇宙に飛び出していったってわけだ。

よくもアメリカさんが、自国の企業の調査をさせたもんだな。え？ させてくれるわけないだろう？ こういうときに必要なものは万国共通、ただ一つ。

マネーさ。

お話し好きそうで、金にだらしなさそうな奴を取っ捕まえさえすりゃいいのさ。

それがいいか悪いかつたら、悪いんだろう。でも、そんなこと言っちゃ、国の一つも守れねえわけ。ちなみに、ロシアの調査のほうが楽だったのは、公然の内緒だ。

さて、問題。

誰がロケットにモグリの衛星をセットしたんだろうな。

打ち上げ計画の数字を変えてもおかしくない人で、ロケットの貨物室、フェアリングを点検できる人。

《スペース・アトラス社》の社員に《天上の光》の構成員がいるに違いないってことだ。

一番動きやすい《スペース・アトラス社》での立場は、打ち上げ責任者。

モロミトス博士。二十八歳。女。MITを五年飛び級で卒業したんだと。

はああ、優秀な人って、いるもんなんだな、現実に。

工学博士で、専攻はロケット工学。容疑者のには、ビンゴ。

この業界では新興の《スペース・アトラス社》が巻き返しを狙って、高額でスカウトしたらしい。《スペース・アトラス社》が現在の地位に着くまでには、結構、無理なこともやってきているはずだと。

こいつを尋問してみりゃ、わかるんだけどな。

こつちに不利なことに、《天上の光》の構成員は、ほとんど把握されていないんだ。モロミトス博士が構成員かすら全然わからねえ。

シロにせよ、クロにせよ、任意の聴取なんざしちまったら、日本が探りを入れたことすら、速攻ではれちまう。一気に国際問題に発展だ。

そいつあ、マジい。

アメリカさんの手前、裏で問い詰めなきゃならねえ。んでもって、分室のお出番だってわけだ。

モロミトス博士の写真が出てきた。こいつが、今回のターゲット。

ん？ ん？ ん？

「あああああああ！」

マジかよ。俺は目を疑ったね。こんなことって、あり？

だって、写真に写っていたのは、忘れもしない、散々俺をいたぶってくれたドクター・ファイアンソトだったんだ。髪型も違うち、写真のほうがちよつと若そうだったけど、間違いない。

そーいやあ、『俺の』ロケットがどうのとかいってた。わざわざ日本くんんだりまで来たのは、ロケット

博士だからだったのかよ。すんげー納得。

この時点で、面通し完了。確かに《天上の光》が関わっていることが、ほぼ決定的になった。仕返しのチャンス到来だっ！ むっはっはっは。

俺を連れてきて、良かったじゃんよ。マネキンとか犬コロとかのほうが役に立つなんて金輪際もう言わせねえぜ。「君が日本にいても、写真を見てもらえばいいだけだけどね」とかいふ河本のおっさんの突っ込みは、無視だ。

俺は、そつと森本とか名乗っている美愛を見た。

他人とは思えないぐらいに目がキラキラしてたね。相変わらず香水は臭かったけどな。

8

俺はTシャツ、破れたダボダボのズボンに野球帽という、いかにもハイスクールの生徒のような格好に着替えさせられた。

これじゃ、日本と変わらねえんだけど。

何？ もつと、だらしなく着ろ？ おかあちゃんの躰が良くてね、そんな格好、できませんよ。

と思つたら、ゆるくくダサ目に着たほうが、確かに周りに馴染みそうだったよ。

アメリカつて、ファッショナブルな国じゃなかったのかよ？

おりゃ、びっくりしたね。

俺たちは《スペース・アトラス社》の表玄関から通りを渡った、向こう側の角を曲がったところで、車内待機になった。

につつき、モロミトスを待つ。

数時間が経ち、時差ボケも手伝つて、こつくりこつくり船を漕ぎ出したころ、携帯に電話が入った。

裏門からモロミトスが出て行つたらしい。ある意味、お約束っちゃあ、お約束。

ばつちり、裏も別動隊が固めてるぜ。

ドゥルン。河本のおっさんは、すかさずエンジンを掛けると、モロミトスの出ていった方向に向けて車を向けた。

「ドクター・ファイナント、いや、モロミトスの家の方向じゃないなあ。会社に出しているのが正しい住所ならな。ちよつとの間、ドライブだ」

もう一つ、報告があった。

通信衛星《きざはし》が通信を断絶して、行方不明になつちまつたらしい。二機目のブレイクアップだ。今回は、断絶して瞬時に第二の犯行声明が出た。

これで確実だ。

何がつて？ 事件だつてことだよ。

一機なら偶然デブリがぶつかつて、ブレイクアップすることもある。犯行声明は張り子の虎で、たま

たまの事故に便乗したってわけだ。

実は大方の見方は、これだったんだ。そんな簡単にアメリカの目を盗んで、衛星なんてほしいほい上げられないもんな。

「だけど、二機が三日も空けずにブレイクアップするなんて事態、そうそうあることじゃねえ。

そもそも、デブリがぶつかって衛星が死んじゃうなんて、十年に一度あるかないかの出来事なんだぜ。

つまり、人為的事故。最悪のシナリオとして、本当に宇宙にちっこい衛星が十何個か上がっちゃまってるって考えるのが妥当だ。あららら。えらいこっちゃ。

「こりゃ、まともに取り合ってたアメリカが本格的に出てくるぞ。と言っても、今からじゃ、全軌道が使えなくなるまで、あと四日。間に合わんがなあ」

美愛のはずの森本と名乗る女を見ると、目の中に表情がなかった。緊張しているふうでもない。

面倒だから、変装中の美愛は、森本美愛ってあだ名付けちやる。

森本美愛は、ただ、いるからいる。ただ、それだけだった。

いるって知らなきゃ、心配すらわからねえかもしれなかった。

ふーん。美愛って仕事前は、こんな感じなんだ。

9

車は庭付き一戸建ての閑静な住宅街に入っていく。

案の定、モロミトスは一角にある二階建ての家に入って行った。

遠目で、夜だったけど、確かに見覚えのある顔だった。俺にヒールで蹴りかましてくれやがった女だった。

「後ろを何度も見てやがる。……のわりに、警護が手薄だ。誰もいない」

「まだ、面が割れてないと思ってるんじゃないすかね？」

と、これは魚石さん。

「『スペース・アトラス社』に出している住所は、嘘なのか？」

「いや、それも本当だと思います。押さえてあるはずですよ。それくらいの資金力は、モロミトスならあります」

あの女、金持ちだったんだな。道理で、いい身なりしてると思っただぜ。

「じゃあ、始めようか」

河本のおっさんが、まるで庭の草抜きをするかのような口調で、号令を懸けた。

何を？ 俺にや、さっぱりわからねえ。

とつとつ、家の中に入ってふんじばるんじゃないかねえのか？

「まだだ」

後部座席にいる魚石さんが三段重ねのお重ぐらいの大きさの箱を取り出した。